

沢原5号墳・高田遺跡
発掘調査報告書

昭和58年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

- ・ 本書は養父郡養父町養父市場字大谷に位置する沢原 5 号墳と、朝来郡和田山町高田字塚穴に位置する高田遺跡の調査報告書である。
- ・ 調査は、兵庫県八鹿土木事務所の一般県道物部・養父線道路改良工事に伴って、実施したものである。
- ・ 調査は、兵庫県教育委員会が、兵庫県八鹿土木事務所の委託を受け、沢原 5 号墳を吉識雅仁が、深井明比古の協力を得て、実施した。高田遺跡については森内秀造・吉識が実施した。
- ・ 遺構の写真については、沢原 5 号墳を吉識が、高田遺跡を森内・吉識が撮影したが、遺物写真については、森昭氏にお願いした。
- ・ 遺構の実測については調査員が主として行い、一部深井の協力を得た。
- ・ 記録の整理、遺物の実測及び整図は主として吉識が行い、鉄製品について町口ひろ子・大平茂、高田遺跡の須恵器について山下史朗・村上賢二の協力を得た。また整図では平田博幸の協力を得た。
- ・ 写真図版のレイアウトは大平によるところが大きい。
- ・ 原稿の執筆は、沢原 5 号墳を吉識が、高田遺跡については森内、吉識が分担した。文末に氏名を記し、その責任の所在を明らかにした。
- ・ 本書の編集は、大平・村上泰樹の協力を得て、吉識が担当した。
- ・ 本書に使用した標高は、兵庫県八鹿土木事務所の工事用 BM から引用したものであり、方位は磁北を表わす。
- ・ 今回の調査の実施については、養父町教育委員会、兵庫県八鹿土木事務所等、関係各方面から多大な協力、援助を頂いた。ここにお礼申し上げたい。

本 文 目 次

I はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 歴史的環境.....	2
3. 沢原古墳群の概要.....	4
II 沢原5号墳の調査.....	5
1. 調査前の状況.....	5
2. 馬蹄形の溝.....	5
3. 墳丘.....	5
4. 埋葬施設.....	8
5. 遺物出土状態.....	10
6. 遺物.....	13
(1) 石室内出土遺物.....	13
(2) 溝内出土遺物.....	17
(3) 墳丘内出土遺物.....	18
(4) 溝上及び墳丘覆土出土遺物.....	19
7. まとめ.....	19
III 高田遺跡確認調査.....	22
1. 位置と現状.....	23
2. 調査の概要.....	23
(1) 北地区.....	23
(2) 南地区.....	24
3. 遺物.....	26
(1) 弥生式土器及び土師器.....	26
(2) 墳輪.....	27
(3) 須恵器.....	27
4. まとめ.....	28

挿 図 目 次

第1図 附近の遺跡分布図	3
第2図 沢原古墳群分布図	4
第3図 1・5号墳墳丘測量図	6
第4図 墳丘断面及びその他土層断面図	7
第5図 列石及び石室実測図	8
第6図 石室閉塞状況実測図	9
第7図 石室内遺物出土状況実測図	10
第8図 石室 実 測 図	11~12
第9図 石室内出土遺物実測図	14
第10図 石室内出土遺物実測図（鉄製品1）	15
第11図 石室内出土遺物実測図（鉄製品2）	16
第12図 溝内出土遺物実測図	17
第13図 溝内出土遺物実測図	18
第14図 墳丘内出土遺物実測図	18
第15図 墳丘内出土遺物実測図	19
第16図 砥石 実 測 図	19
第17図 溝上及び墳丘覆土出土遺物実測図	20
第18図 遺跡周辺地形図	22
第19図 グリッド及びトレンチ配置図	23
第20図 土層堆積状況実測図	24
第21図 出土遺物実測図（1）	25
第22図 出土遺物実測図（2）	26
第23図 出土遺物実測図（3）	27

図 版 目 次

- 図版第1 沢原5号墳航空写真
- 図版第2 沢原5号墳 上) 遠景(円山川堤防上より)
下) 調査前の状況
- 図版第3 沢原5号墳 上) 横穴式石室の閉塞状況と列石の関係
下) 墳丘裾部列石
- 図版第4 沢原5号墳 上) 閉塞状況(羨道側から)
下) 閉塞状況(玄室側から)
- 図版第5 沢原5号墳 上) 横穴式石室全景
下) 羨門部よりみた横穴式石室
- 図版第6 沢原5号墳 上) 横穴式石室奥壁の状況
下) 玄室側からみた羨道部の状況
- 図版第7 沢原5号墳 上) 東側壁上からみた玄室内部の状況
下) 羨道部上からみた玄室内部の状況
- 図版第8 沢原5号墳 上) 第1・第2遺物群出土状況
下) 第3遺物群出土状況
- 図版第9 沢原5号墳 上) 第4遺物群出土状況…
下) 遺物・石除去後の玄室床面
- 図版第10 沢原5号墳 上) 横穴式石室基底部の状況
下) 斜面下方側の封土断面
- 図版第11 沢原5号墳 石室内出土遺物(須恵器、1・2—第1、4・5—第4、
6~8—第5、9~13—第6遺物群)
- 図版第12 沢原5号墳 上) 左、右上石室内埋土出土遺物(須恵器)、右下溝内出土遺物
下) 墳丘内出土遺物(弥生式土器、石斧)
- 図版第13 沢原5号墳 石室内出土鉄製品(25・18・21・20—第4、12~14・
26—第2遺物群、3~5・8~10・16—第3遺物群)
- 図版第14 沢原5号墳 上) 石室内出土鉄製品(2・6・7・11—第3、22—第4
1—第1遺物群、15—第2遺物群、刀子1—溝内)
下) 溝上及墳丘覆土出土遺物
- 図版第15 高田遺跡 遺跡付近航空写真
- 図版第16 高田遺跡 全景及び土層堆積状態
- 図版第17 高田遺跡 出土遺物(弥生式土器、土師器)
- 図版第18 高田遺跡 出土遺物(埴輪及須恵器)

I は し が き

1. 調査に至る経過

但馬の幹線道路である国道9号線と312号線が合流し、一本の道路となる朝来郡和田山町から養父郡八鹿町の間は、朝夕は混雑し、特に行楽シーズンとなると、非常な交通渋滞となり、道路上に車が遙々と続くといった事態となる。

そこで兵庫県八鹿土木事務所は、和田山養父町内の円山川右岸沿いの一般県道物部・養父線と主要地方道宮津・八鹿線の改良工事を合せて実施し、こうした事態の緩和を図ることを計画した。ここで兵庫県教育委員会は予定地内の埋蔵文化財の有無について照会を求められた。ところが改良工事予定地の円山川右岸沿いは、但馬地方では最も古墳が密集する地帯であり、まだ未発見の古墳・遺跡等が存在する可能性が高いことから、分布調査を実施し、その結果に基づいて協議することとした。

分布調査は昭和54年度から昭和55年度にわたって、和田山町内を高島信行氏（現三田市教育委員会職員）、養父町内を政次義孝氏（現養父町職員）に依頼して実施した。

この結果に基づき、古墳については現状保存し、和田山町高田字塚穴に位置する散布地（高田遺跡）については、遺跡確認調査を実施し、その結果を基に、改めて協議することとなった。

こうした協議の後、昭和56年9月より八鹿土木事務所は養父町側から改良工事に着手した。しかし立木伐採が行われたところで、文化財巡視員をお願いしている関宮中学校教諭の高松漸輝氏より、工事地内に古墳が存在しているという連絡を受けた。そこで急遽、吉識が、分布調査をお願した政次氏、高松氏、土木事務所の宮下・加藤氏とともに、現地に赴いた。そこで古墳に間違いないことを確認したため、この部分の工事を一時中止するよう要望し、その保存方法について協議した。

しかし古墳の位置が計画道路の法面にあたり、付近は土砂崩れが起り易い地質であるため、法面等の工法の変更是不可能なことから発掘調査を実施し、記録保存することとなった。またすでに工事には着手されていることから、発掘調査は緊急に実施することになった。

そこで八鹿町内の夕垣古墳群の調査にあたっていた吉識が調査を一時中断し、事務担当をしていた深井の応援を受けて、昭和56年10月29日より同年11月17日にわたって実施した。また高田遺跡の調査は昭和57年1月6日から同年1月14日の間に実施した。

2. 歴史的環境

中国山地に源を発する円山川は、北流して和田山盆地内で粟賀川と合流し北西に向きを変える。朝来郡和田山町高田付近で、円山川の両岸に山々が狭り、和田山盆地は終焉する。この和田山盆地が終焉するあたりの右岸に高田遺跡が位置する。

円山川はさらに山々の間を貫いて北西に流れ、養父郡養父町養父市場付近から再び、養父千石田と呼ばれる冲積地を形成し始める。この付近の右岸に沢原古墳群が位置する。

円山川中流域の右岸には数多くの古墳が築造されており、高田遺跡の背後に位置する奥山、広六林群集墳から^{註1}養父郡八鹿町奥江の、なる古墳群に至る間に、約300基以上の古墳が現在確認されている。この中には大籠群集墳のように、但馬最大の規模を誇る横穴式石室を有する禁裡塚古墳、塚山古墳、西の岡古墳、コウモリ塚古墳といった大規模な古墳を含み、総数約130基から構成される古墳群もある。^{註2}しかし、他の古墳群はいずれも小規模な横穴石室を埋葬施設とする古墳で構成されている。

これらの古墳群にかつて調査の手が入った例は少なく、禁裡塚古墳の石室清掃調査、大籠、鉄屋米地、奥山・広六林などの実測調査など、僅かに実施されているにすぎない。したがって古墳群の内容など不明な点が多いが、同時に実施した夕垣古墳群など早いものは、6世紀前半から中間にかけて築造が開始され、遅いものでも6世紀後半には築造が開始されたようである。^{註3}

こうした状況を示す右岸流域に対し、左岸流域には現在ほとんど遺跡は知られていない。僅かに和田山町宮田に宮ノ前、中山群集墳等が存在し、養父町堀畑に位置する堀畑古墳が知られる程度である。^{註4}

しかし、養父町養父市場養父神社の西側で、地山を削り出して墳丘とした宮の谷古墳が確認されてい^{註5}る。こうした古墳は連続して営まれることが多く、付近に数多くの古墳が存在する可能性が高い。

番号	遺跡名	古墳 基數	番号	遺跡名	古墳 基數	番号	遺跡名	古墳 基數
1	高田遺跡	15	高尾中古墳群	18	29	夜墳古墳		
2	奥山・広六林群集墳	45	赤ばな群集墳	3	30	舞狂丸山古墳群	13	
3	宮ノ前群集墳	8	はげさか群集墳	4	31	舞狂若宮群集墳	11	
4	宮ウシロ群集墳	6	宮谷尾根群集墳	5	32	大籠群集墳	88	
5	中山群集墳	23	若ケ谷小林群集墳	8	33	西の岡古墳		
6	西垣群集墳	3	世賀居山E群集墳	6	34	禁裡塚古墳		
7	亀が首古墳	21	鏡塚古墳		35	塚山古墳		
8	高田八幡社古墳	22	世賀山群集墳	24	36	コウモリ塚古墳		
9	掘畑古墳	23	三本松群集墳	6	37	沢原古墳群	5	
10	谷間地群集墳	8	コガ山群集墳	4	38	沢原東群集墳	3	
11	観音塚古墳	25	こおとし群集墳	12	39	口米地群集墳	3	
12	上野群集墳	2	小坂群集墳	2	40	中米地群集墳	2	
13	大塚群集墳	2	びんぐし群集墳	4	41	鉄屋米地群集墳	3	
14	なる群集墳	7	夕垣古墳群	14	42	宮の谷古墳		

表1 周辺の遺跡



第1図 附近の遺跡分布図

3. 沢原古墳群

光明山から南西に張り出した幅の広い、平坦な尾根上に位置する5基の古墳で構成された古墳群である。尾根の裾を円山川が洗うように北西に流れ、この付近で山々の間を抜けて、養父千石田と呼ばれる沖積地が形成され始めている。

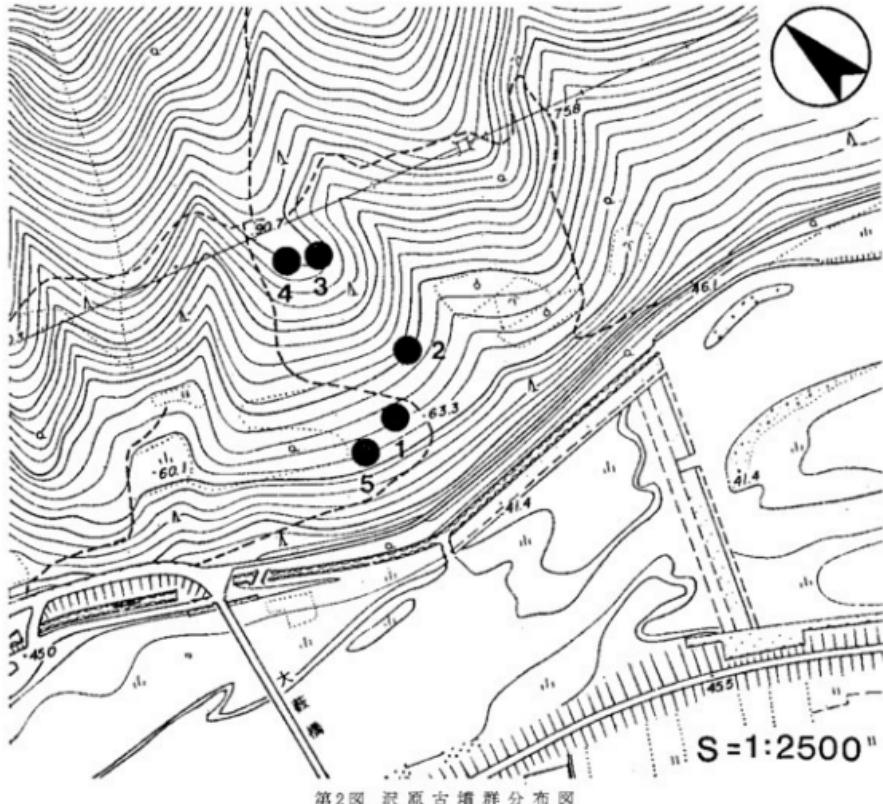
従来は4基の古墳が知られていたが、今回新たに1基が確認され、従来の番号に引き続いで5号墳として調査を実施した。

1号墳と5号墳は尾根先端に、墳丘裾部で約5mの間隔をあけ近接して築造されており、5号墳の墳丘裾部から尾根は急傾斜で円山川に落ち込んでいく。

1号墳は標高約66.0m付近から約70.5mの間に築かれており、5号墳より1回り大きい長径約13m、短径約11mの墳丘をもつ。墳丘中央が擾乱を受け、埋葬施設に使用されていたと思われる石材が、散乱している。石材の大きさから埋葬施設は横穴式石室と思われるが、規模の小さいものと推測される。

2号墳は1号墳の約20mほど上方の尾根上に築かれた径約10mの円墳である。墳丘は低く、小規模なものである。

3・4号墳は隣接し築かれていたものと思われるが、ともに、すでに墳丘の大半が大きく壊されている。古墳としての形状を残しておらず、若干の石材が残されているにすぎない。本古墳群中では、最も高所に位置するグループである。



第2図 沢原古墳群分布図

II 沢原5号墳の調査

1. 調査前の状況

光明山から南西に伸びた尾根上は、幅が広く平坦であるが、先端からは急傾斜となって円山川に向って落ち込んでいく。この傾斜変換点付近の尾根上に5号墳は位置する。尾根上の平坦な場所を占地する1号墳とは、直線距離で約20m、墳丘裾部で約5mの間隔を開け、築造されている。1号墳とは標高差で約3.5mを測るが、1号墳の背後にも古墳の築造に適した場所があるにもかかわらず、不安定な場所に築造されている。

墳丘測量の結果では、標高約65.0m～約67.0mの間に築かれ、等高線走行方向に長い、長径約13m、短径約10mの楕円形を呈する円墳であろうと思われた。しかし墳丘の斜面上方側には尾根を横切って後世の水路が掘削されており、この際の廃土が墳丘上に、水路の堤防を形づくるように積み上げられていた。また、周辺は水田及び畑として階段状に開墾され、墳丘裾部は1m以上の盛土を受けたり、一部削平を受けたりしていた。このため分布調査時に古墳として確認できなかったものと思われる。

また墳丘中央部がコの字形に約20m窪んでいたことから、埋葬施設は横穴式石室と思われた。しかし他の外部施設については、墳丘の外形観察では確認できなかった。

墳丘上及び後世の水路内などから須恵器、土師器の小片が採集された。
なお、工事着手後に発見されたため、墳丘北西部は削り取られていた。

2. 馬蹄形の溝

石室はほぼ等高線に沿って、つまり斜面に並行して築かれており、墳丘の築造にあたっては、山側の斜面を削りとる造作を行っている。西端は工事のため、すでに削り取られており不明だが、奥壁背後から羨門付近まで掘を織り、羨門付近で地山と一致して消えている。溝底は標高の最も高い墳丘北東側が高く、そこから北、南へ分かれて墳丘裾部を織る。平面形は南東一北西方向に伸びた馬蹄形を呈し、最大幅約3.6m、深さ約40cmを測り、断面は浅い皿状を呈する。

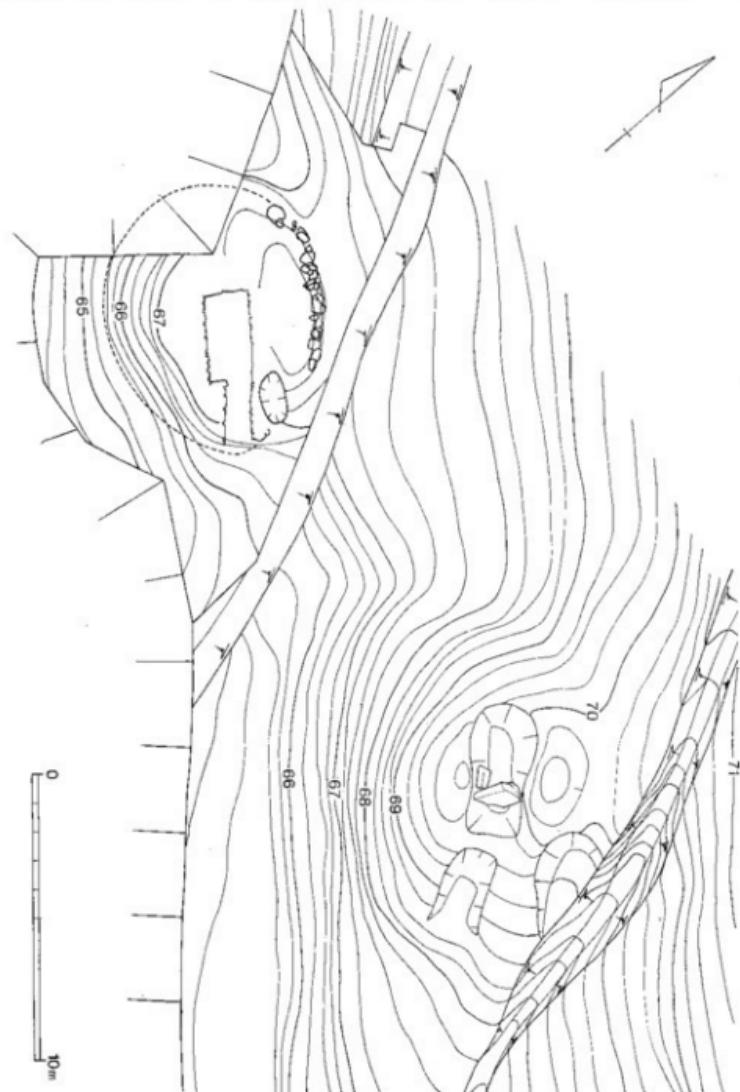
溝の北側は整地の際のカット面であり、墳丘側も一部地山面を掘り込み、墳丘の基底の東半を削り出している。したがって溝の掘削という作業工程段階は、墳丘の規模等が決められていたものと思われ、何らかの一定の企画性が存在したことが考えられる。一見不規則に進められたようにみえる墳丘の構築にも、一連の企画性があった可能性もある。

3. 墳丘

墳丘は斜面下方側で標高約64.5m、墳頂部で標高約66.8mを測る。
尾根上の斜面上方側を削平、整地し、山側に弓状に溝を織り、石室床面を創出、石室の基底石を据えた後に、墳丘封土を積み上げている。

墳丘封土の積み上げは、ほぼ石室の構築と並行して行われ、各種の土を交互に積み上げている。ただ山側の封土内にみられる20の黄褐色土は他の封土と異なり、明るく粘質である。石室の高さから考えて、天井石を覆っていたものと考えられる。

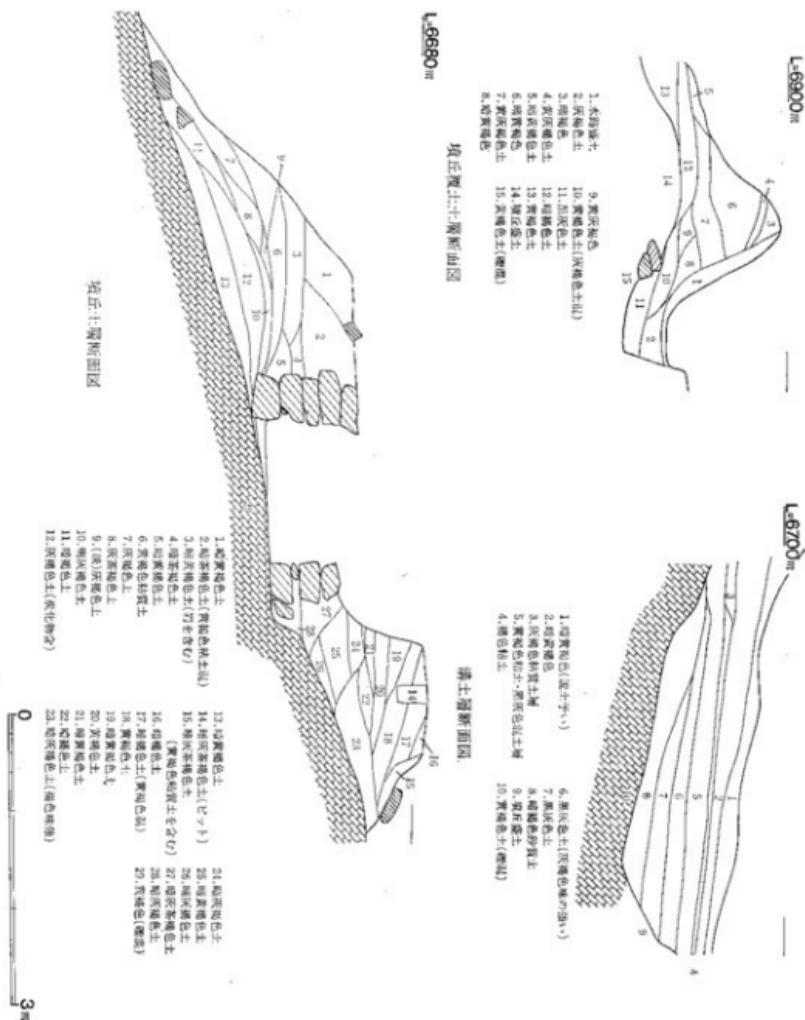
この墳丘封土、石室の構築と並行して、山側の墳丘裾部には、山石を利用した列石を繞らしている。列石は約2～3段、高さ約50cm～60cmの高さに積み上げられ、羨道入口の山側から墳丘東裾をまわり、奥壁の背後に至って消えている。羨道入口から約1.2m統いて、約2.5mの間は途切れているが、お



第3図 墳丘測量図

そらく崩壊したためと思われる。奥壁背後の列石の端には約80cm程度の大きさの石が使用されているが、全体的には約40cm大までの石が使用されている。羨道部の入口では、列石が側壁に取り込まれており、側壁と列石の区別は難しい。斜面下方側では、羨道部入口から約1mの範囲に山石の散乱がみられ、列石が崩壊したものと思われる。

また標高約46.5m付近に傾斜の変換点がみられ、ここに斜面下方側の墳丘裾部が求められる。斜面

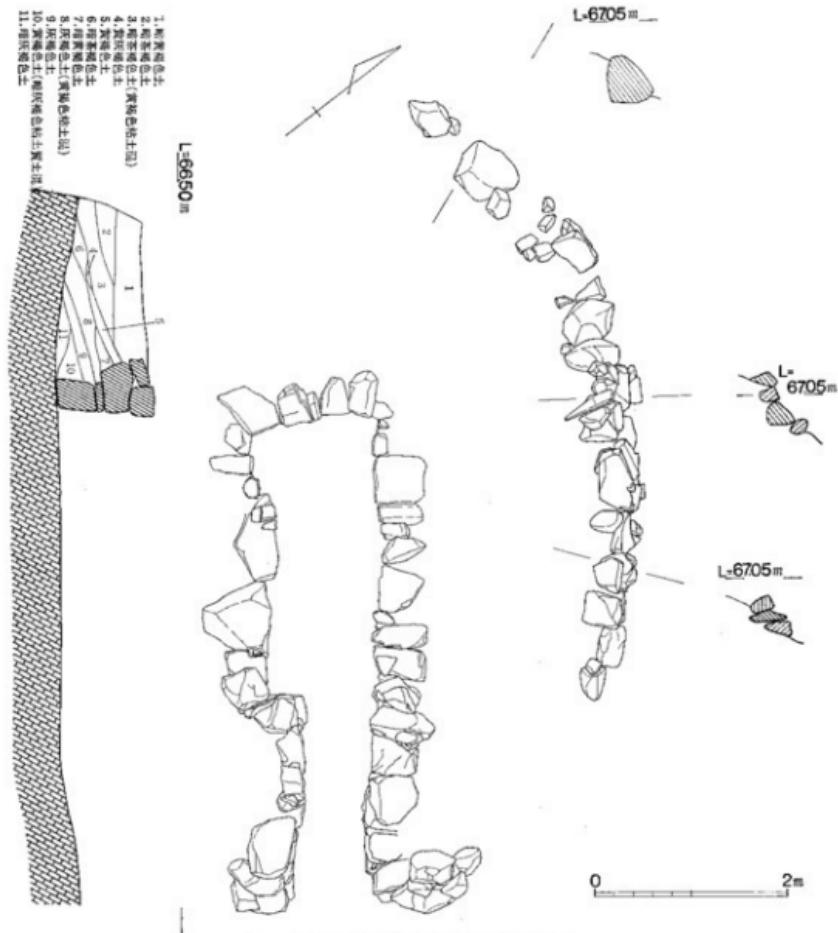


第4図 墳丘断面及その他土層断面図

上方側の墳丘裾部を列石とすると、墳丘は長径約9m、短径約7.8mの、斜面と並行して長い、梢円形を呈する円墳である。高さは約1.5mを測る。

4. 埋葬施設

墳丘中央東寄りに営まれた、左側に袖をもつ片袖式の横穴式石室であった。開口を S 55° E とし、斜面と並行して南東に開口する。すでに天井石は抜き取られてなく、石室上部も擾乱を受けていた。羨道部には全体に閉塞石が残る。閉塞は袖部の羨道側に根石を置き、この上に3段の石積みをしている。さらに、この石積みより羨道側に埋土をし、埋土上に石を雜然と積み上げ、羨門部分では外に向か傾斜をもたせていた。根石の上に乗るような状態で第4遺物群が出土したことから、閉塞石の根



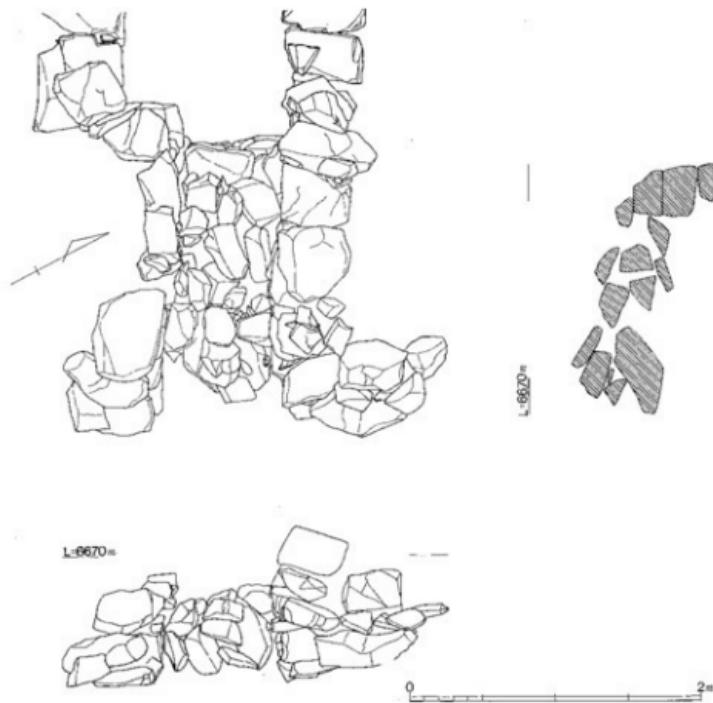
第5図 列石及び石室実測図

石は玄室と羨道を分ける役目も兼るものと思われる。

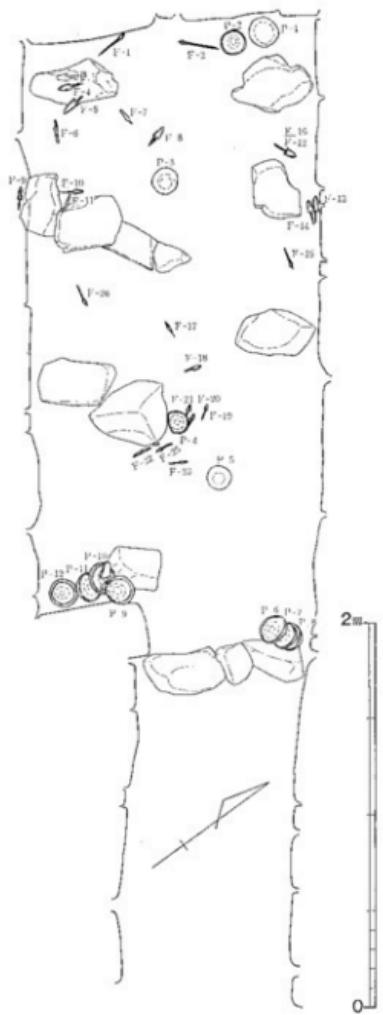
石室は全長約5.3m、玄室長約3.1m・幅約1.5m・現存高約1.15m、羨道長約2.2m・幅約0.9m・現存高約1.3mを測る。

玄室の床面には厚さ約10cmに玉砂利が敷かれ、この上に40cmまでの石が配置されていた。当初、これを壁から落下したものと考えたが、この石の上からも遺物が出土したことから、棺台または仕切り石と考えられる。東側壁に沿う3個の石の配置は、棺台の可能性が強い。羨道部の床面は入口から袖部にかけて傾斜している。

奥壁は基底に3石が据えられ、この上に3~4段の石積みが残る。現在高は約1.06mを測る。東端の石がやや小さい他は、石の大きさもほぼ揃い、丁寧に積み上げている。奥壁と西側壁との角には、両壁に架けられた石が認められた。西側壁の玄室側の基底石は袖部側がやや小さい他は、比較的大きさの揃った6石を据えて構築している。中央付近の石材が約90cm~95cmと大きく、両端にはやや小さい石を使用している。袖部の角が最も良く残り、高さ約1.15mまで残る。この部分でも袖部と側壁の両壁に跨る石材がみられる。袖部は高さ約75cmの石を、西側壁の内側に立て、袖石としている。この袖石から羨道側の西側壁は非常に乱雑な石積みであり、玄室部とは大きく異なる。羨道入口の基底の石は、底の丸い不安定な石を使用している。築造当時には、羨道入口がそのまま列石と連続していた



第6図 石室閉塞状況実測図



第7図 石室内遺物出土状況実測図

東側壁際の中央付近から出土した鉄鎌5本からなる1群である。5本の内の4本は、刃部長が9cm前後の大型の鎌であり、残りの1本は長頭鎌である。東側壁に沿った3個の石を棺台と考えれば、第1遺物群と第2遺物群と合せて1群とした方がよいのかもしれない。

第3遺物群

奥壁と西側壁の角から出土した、杯蓋1個体と鉄鎌・刀子からなる1群である。杯蓋は反転して出土しており、鉄製品類は散乱して出土している。鉄製品類の鉄鎌は大型のものが多いが、小形のものが2

と思われるが、崩壊してしまっていた。東側壁は比較的大きさの揃った7石を、玄室側に6石、羨道部の玄室寄りに1石を据え、基底の石としている。この基底石の上に3段の石積みが残り、玄室側で現存高約0.95mを測る。西側壁に比べると、使用されている石材はやや小さい。羨道部側は中央から入口にかけてが、使用している石材は小さく、非常に亂雑な積み方をしている。玄室側とは大きく積み方が異なり、羨道部は難ぎ足されたような感がする石の積み方である。現存高約1.3mを測り、石室の規模から考えて、築造時の高さに近い数値であろうと思われる。羨道部の入口は列石に連続し、列石は東へ約1.2m続いて崩壊している。

5. 遺物出土状態

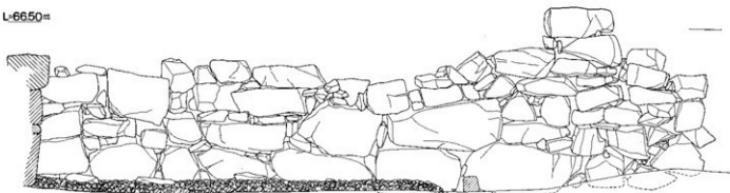
遺物は石室内を中心に、溝内から鉄製品と土器類が、墳丘内からは弥生式土器と石斧が、墳丘覆土及び溝内の堆積土から平安時代末以降の土器類が出土している。しかし石室内以外の遺物類は遊離したもので点数も少なく、また本墳と直接関係するかどうかは疑しい。したがってここでは特に問題となる石室内の遺物の出土状態に限って取り扱うこととした。石室内の床面上からは杯身・杯蓋を中心とした13個体土器類と、鉄鎌を中心とした25本の鉄製品類が出土したが、これらの遺物はその出土位置から6群に分けることができる。

第1遺物群

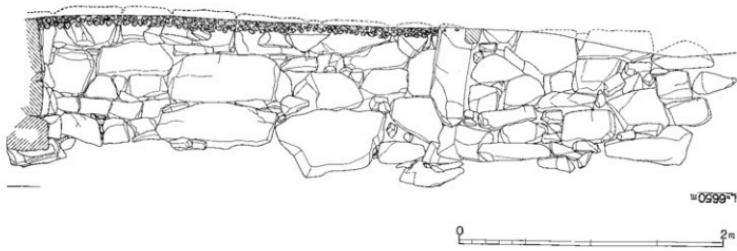
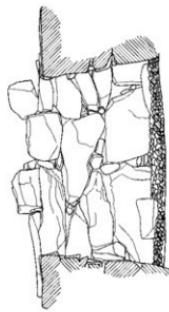
玄室奥壁右隅の杯身・杯蓋各1個体と、鉄鎌1本からなる1群である。杯身・杯蓋ともに反転した状態で出土しており、元来の位置を動かされている可能性もある。また土器類は、石室内では、最も古い様相をもつ。

第2遺物群

L-6650=



L-6650=



第8図 石室実測図

本含まれている。ただ第4遺物群と接しているため、鉄製品類は両群のものが混在している可能性もある。杯蓋は第1遺物群のものより新しい様相をもっている。

第4遺物群

玄室のほぼ中央から玄室入口付近にかけて出土した、杯身・杯蓋と鉄鎌・刀子からなる1群である。杯身・杯蓋はセットになるものであるが、ともに反転し、やや離れて出土している。鉄製品類は杯蓋付近に集中して出土しており、鉄鎌はすべて小形のものであった。杯類は石室内から出土したもの中では、最も新しい様相をもつものである。

第5遺物群

羨道部と玄室との境界付近の東側壁際、閉塞石の根石に一部が乗った状態で出土した杯蓋3個体からなる1群である。この3個体はいずれも反転し、重ねられており、床面からは約7cm浮いた状態で出土している。いずれも第6遺物群等の杯身をセットになる。

第6遺物群

袖部から重なって出土した杯身・杯蓋、計5個体からなる1群である。棺台と思われる石に一部の土器は乗り、第5遺物群とセットになるものが含まれており、また古い型式のものと新しい型式のものが混在している。

石室の遺物は以上の6群に分れて出土したが、杯類はいずれも反転していたり、重ねられたりしており、特に第5・第6遺物群は追葬の際に片付けられたものと思われる。

6. 遺 物

(1) 石室内出土遺物

石室内からは、6群に分かれて、杯蓋7個体と杯身6個体の須恵器類と、床面上から出土し、埋土中から杯身1個体と壺1個体の土器類と、鉄鎌21本と刀子4本の鉄製品類が出土している。

須恵器類

杯蓋 その形態的特徴から、IV類に大別できる。

I類 (第9図—1) 口径約13.6cm、器高約3.5cm、扁平な天井部で、口縁部と体部とに分けるものはない。口縁端部内面に、一条の沈線を施す。色調は青灰色で、一部に釉が付着する。胎土はやや粗く、焼成はおおむね良好である。(第1遺物群)

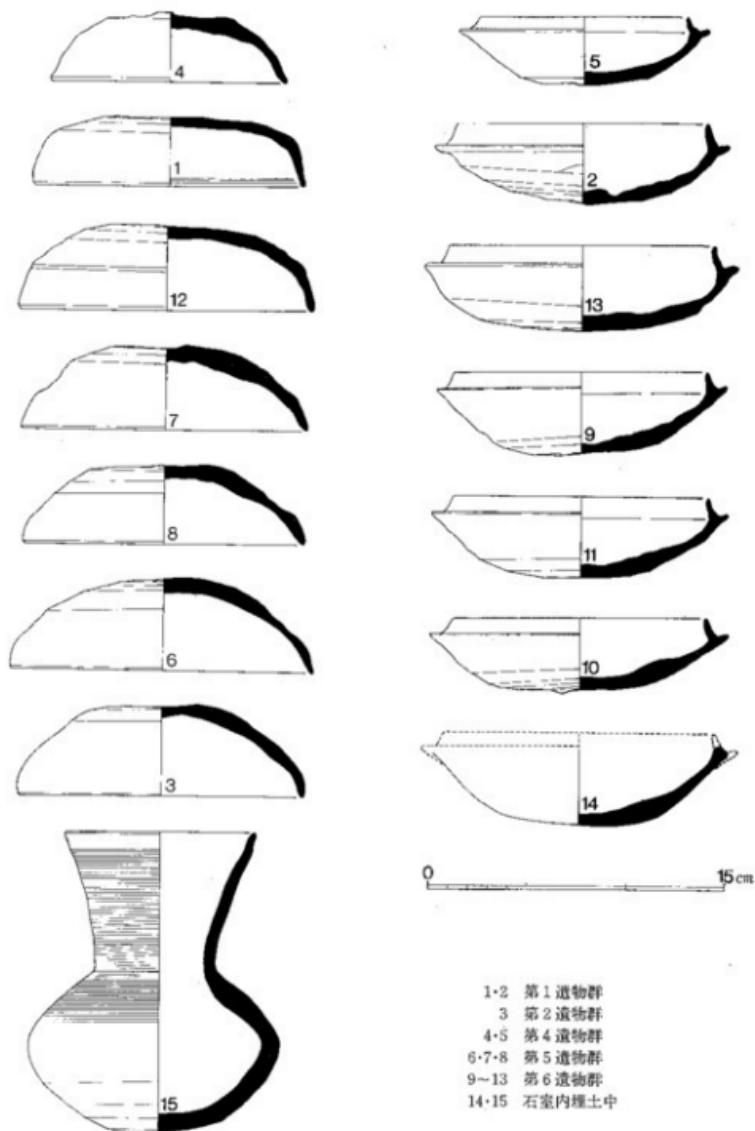
II類 (第9図—12) 口径約14.8cm、器高約4.3cm、口縁部と体部との境界に鈍い稜をもつ。色調は青灰色で、胎土は5mmまでの砂粒を含み粗い。焼成はやや不十分であり、天井部に一本線のヘラ記号をもつ。(第6遺物群)

III類 (第9図—3・6～8) 体部が内側して口縁部となる。口縁端部は丸い。口縁部と体部を分けるものではなく、口径は約12.2cm～15.3cm、器高約4.0cm～4.7cmを測る。全体に胎土は粗く、焼成は不十分である。6は褐色を呈し、極めて焼成が不十分であり、石室床面から遊離して出土した14とセットになるものと思われる。7は暗茶褐色を呈し、9とセットになるものと思われ、8は11セットになるものと思われる。(3は第2遺物群、6～8は第5遺物群)

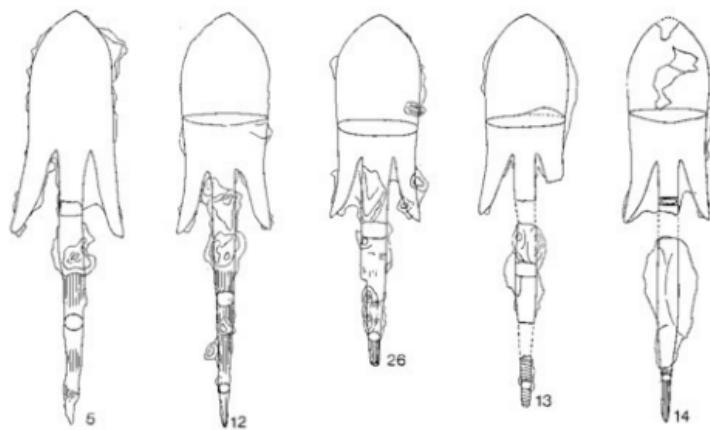
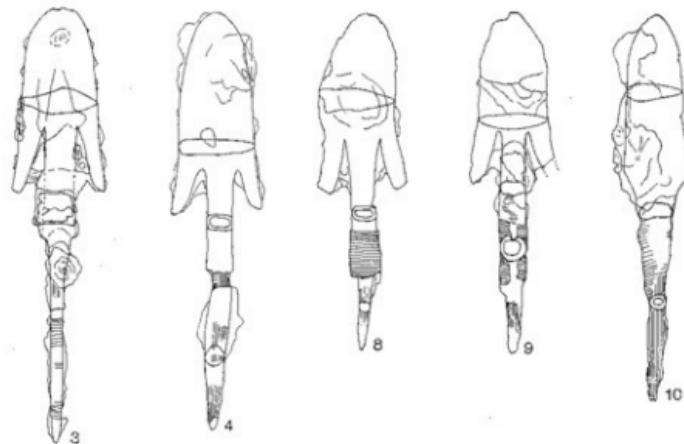
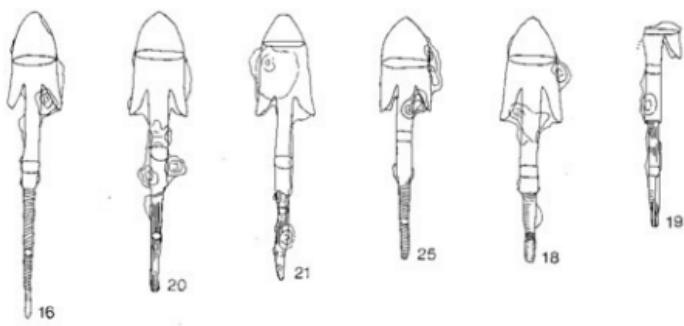
IV類 (第9図—4) 口径約14.2cm、器高約4.0cm、胎土は粗く、色調は黒灰色を呈する。小型

のもので、口縁部は外反し、端部は丸い。天井部はヘラ切り未調整であり、5とセットになる。(第4遺物群)

杯身 その形態的な特徴からⅢ類に大別できる。Ⅰ類は杯蓋のⅡ類とⅡ類は杯蓋Ⅲ類と、Ⅲ類は杯蓋Ⅳ類とセット関係をもつものと思われる。

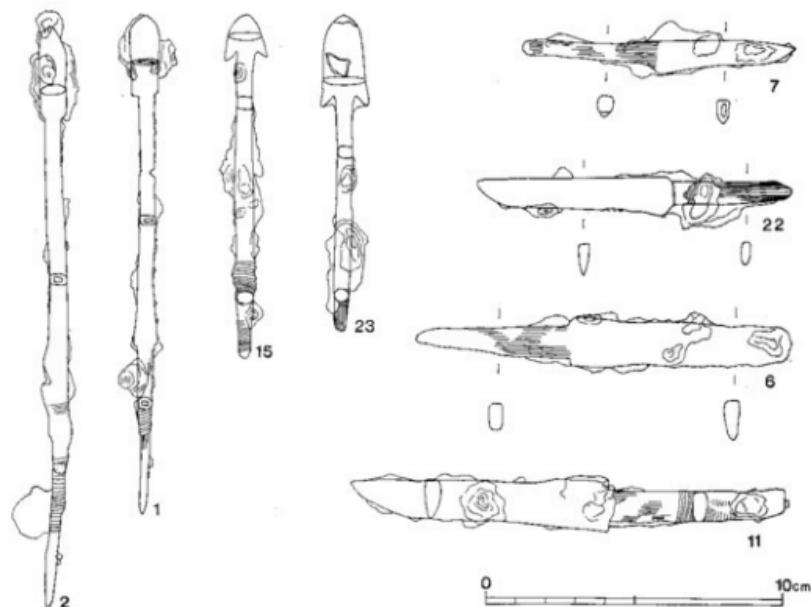


第9図 石室内出土遺物実測図



10
cm
0

第10図 石室内出土遺物実測図（鉄製品1）



第11図 石室内出土遺物実測図（鉄製品2）

I類（第9図—2・13） 口縁部は内傾して立ちあがり、端部は丸い。

2は受部上にナデによるものと思われる沈線がみられる。ヘラ削りは、体部の3/4以上にまで及ぶものがあり、非常に丁寧である。胎土はやや粗いが、焼成は良好で青灰色を呈する。

13は体部に一本のヘラ記号がみられ、同様のヘラ記号をもつ杯蓋Ⅱ類、12とセットになると思われる。

2は杯蓋のⅡ類、1とセットになると考えられる。（2は第1遺物群、13は第6遺物群）

II類（第9図—9・10・11） 外上方に伸びる受部から内傾する口縁が立ちあがる。口縁部の立ちあがりは短い。9・11は胎土が粗く、色調は暗茶褐色を呈し、焼成はやや不十分である。10の胎土は良く、胎土中に黒灰色粒を含む。焼成は良好である。9は杯蓋Ⅲ類の7と、11は同類の8とセットになる。（第6遺物群）

III類（第9図—5） 小形のもので、受部は外上方に立ちあがり気味となり、口縁部は大きく内傾して短く立ちあがる。色調は黒灰色を呈し、胎土は粗い。杯蓋IV類の4とセットになる。（第4遺物群）

鉄 製 品

鉄 鐛 21本が出土しており、その形態的特徴から、長頸鎌と有茎鎌に分けることができる。

有茎鎌は、柳葉式鎌1本と腸抉柳葉式鎌17本が出土し、腸抉柳葉式鎌は刃部の大きさから、Ⅲ類に分

けられる。

I類は、刃長が約6.8cmを超える、刃幅の広い大型のものである。5・12～14・26がこれに属する。完存するものは5・12であるが、5は全長約14.1cm、刃長約7.8cmであり、刃幅は約2.9cmを測る。12は全長約14.2cm、刃長約7.6cm、刃幅約2.9cmを測る。(12～14、26は第2遺物群、5は第3遺物群)

II類は、3・4・8・9の4本であり、刃長が約5.7cm～約6.7cm、刃幅が約2.2cm～2.6cmである。I類と比較すると刃部の幅が狭く、一回り小さい。3・4がほぼ完存しており、3は全長約14.8cm、刃長約6.2cm、刃幅約2.6cmを測る。4は全長約14.3cm、刃長約6.7cm、刃幅約2.6cmを測る。4本とも茎部分に木質及び糸状の巻き痕が残る。(3・4・8・9—第3遺物群)

III類は、16～21・25の7本であり、刃長約3.1cm～3.6cmで、刃幅が約1.4cm～1.7cmと小型の刃部をもつものである。16がほぼ完存しており、全長約10.4cm、刃長約3.3cm、刃幅約1.5cmを測る。茎部分に糸状の巻き痕を残す。

10は逆刺をもたない有茎柳葉式の鎌である。全長約13.2cm、刃長約6.2cm、刃幅約2.2cmを測り、茎部に木質と糸状の巻き痕を残す。茎部の断面は丸い。(第2遺物群)

1・2は長頭鎌であり、ともに両刃丸造りものである、茎部分に糸状の巻き痕が残る。(1—第1遺物群・2—第3遺物群)

刀子 第3遺物群・第4遺物群から4本が出土している。両闘のもの3本と片闘のもの1本がみられる。

6・11・22は両闘の刀子であり、茎部に木質・糸状の巻き痕を残す。刃部の中央がいざれも内彎している。最も大きいものは11で、全長約14.8cmあり、刃長約8.7cm、刃幅1.3cmを測る。(6・11—第3遺物群、22—第4遺物群)

7は片闘の刀子である。小型のもので、刃部が内彎している。茎部に木質・糸状の巻き痕を残す。(第3遺物群)

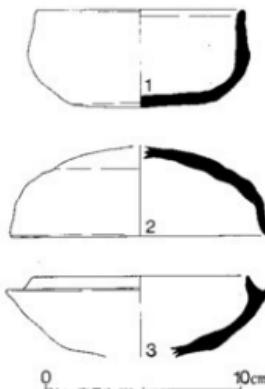
(2) 溝内出土遺物

墳丘の北側から東側をまわる馬蹄形の溝内からは、高杯・椀の須恵器類と鉄鎌・刀子の鉄製品が出土している。1号墳との間から出土しており、1号墳の遺物の可能性もある。

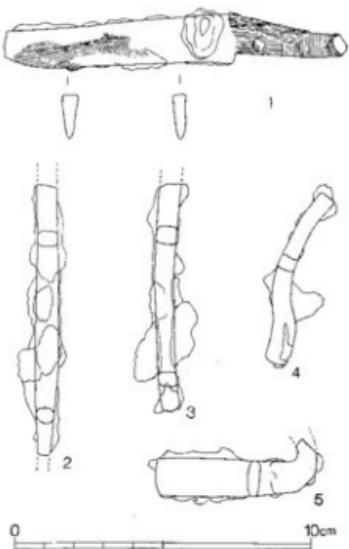
須恵器

有蓋高杯 3は、高杯の杯部片であり、口径約11.0cm。内傾度のつよい口縁部は短い。色調は青灰色を呈し、焼成は良好であるが、胎土は粗く、全体に粗いつくりである。

蓋 口径約13.0cmを測る蓋形土器である。色調、胎土とも3の有蓋高杯に酷似しており、おそらくセットになるものと思われる。天井部の中央を欠くが、天井部はヘラ切り未調整のままであり、全体に雑なつくりである。



第12図 溝内出土遺物実測図



椀 口径約10.6cmを測る。色調は青灰色、胎土は粗いが焼成は良好である。底部はヘラ切り未調整のままでありつくりは雑である。胎土、色調、焼成とも2・3の土器と類似している。

鉄 製 品

刀子・鐵鎌用途不明鉄製品が計8本出土している。

刀 子 1は鹿角装の刀子であり、背側から茎部にかけて鹿角の一部が残っている。おそらく両側のものと思われ、全長約11.5cm、刃長約7.8cm、刃幅約1.4cmを測る。茎部は地金の上に棒の皮状のものを巻き、この上に板状のものを挟み、この上から再度地金上と同様の巻きをして、鹿角と装着している。

用途不明鉄製品 5は板状であり、端が曲げられ、環状を呈す。その用途については不明である。

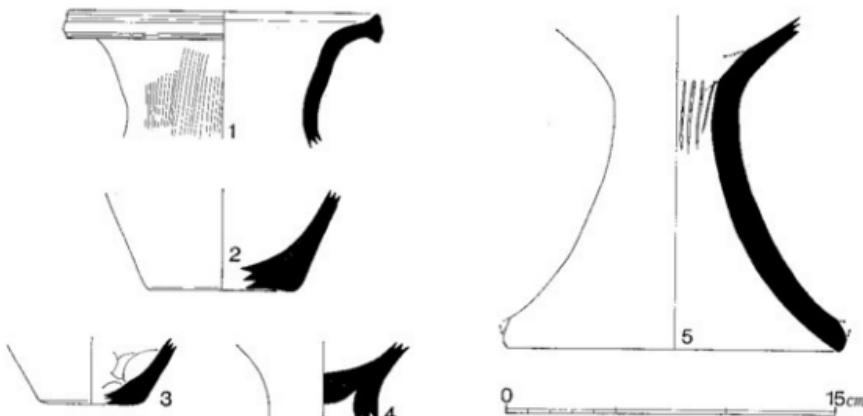
(3) 墳丘内出土遺物

墳丘封土内からは、弥生式土器と石斧が出土している。

壺形土器 1は外反した頸部が大きく開き、口縁部には二条の凹線を施している。口縁端部は短く立ちあがる。頸部の器表にはハケ目調整が残る。口径約14.3cm。

壺形土器 2・3は壺形土器の底部である。2は底径約6.6cm、3は約4.5cm。3の内面には指頭圧痕がある。

高杯形土器 4・5は高杯形土器の脚部及びその破片である。5は脚径約15.3cmを測り、脚筒部にし



第14図 墳丘内出土遺物実測図

ぼり痕を残す。杯底部が剝離しており、おそらく円盤を充填していたものと思われる。4は杯底部と胸部にかけての破片であり、杯底部は円盤を充填している。

石斧 磨製の扁平片刃石斧である。全長が約7.6cm、幅約5cm、厚さ約1.6cmを測る。ほぼ完形品で、平面は長方形を呈するが、基部と刃部は外彫する。両側面に、面取りが見られ、断面は鈍い八面体を呈する。刃部には、ほぼ直交方向の条痕が認められる。

(4) 溝上及び墳丘覆土出土遺物

馬蹄形の溝の埋土上層及び墳丘を覆う堆積土の中から小片で、図示できたものは僅ではあるが、多量の土器が出土している。1～4は土器及び土質質土器である。1は小皿で、口径約8.6cm、器高約1.6cm。2・3は約13.5cm～14cmの口径をもつ皿である。5・6は須恵器の鉢形土器であり、内面が磨耗している。明石市の魚住古窯址群に産地が求められるものかもしれない。

7・8は瓦質土器である。7は壺形土器の口縁部片と、口径約30cmを測る。8は土釜口縁部片で、口径約30cmを測る。

砥石 表土に近い層から出土したため、その年代は不明である。全長約12cm、幅約2.8cm厚さ約2.6cmを測る。木口面を除く四面に使用痕がみられ、使用痕の中に石の表面を抉ったようになっている。

おそらく、かなり硬質の物を研いだものと思われる。

7. ま と め

以上が一般県道物部・養父線改良工事に伴って発掘調査を実施した、沢原5号墳の概略である。

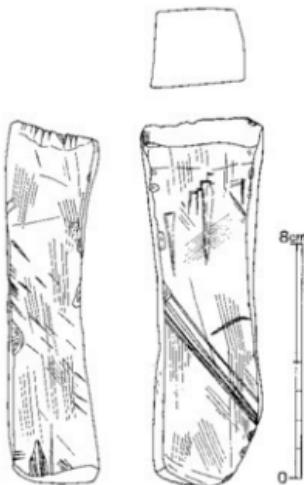
すでに述べたように沢原5号墳は、光明山から南に張り出した尾根が、急傾斜となって円山川に落ち込む傾斜変換点付近、標高約64.5m～67.0mの尾根上に築造されていた。

墳丘は石室の開口方向に長く、長径約9.0m、短径約7.7m、高さ約1.5mの橢円形を呈する円墳であり、尾根上方側の墳丘裾部には山石を利用した列石が認められた。また尾根上方側には墳丘裾部を半周する溝を繞らしていた。

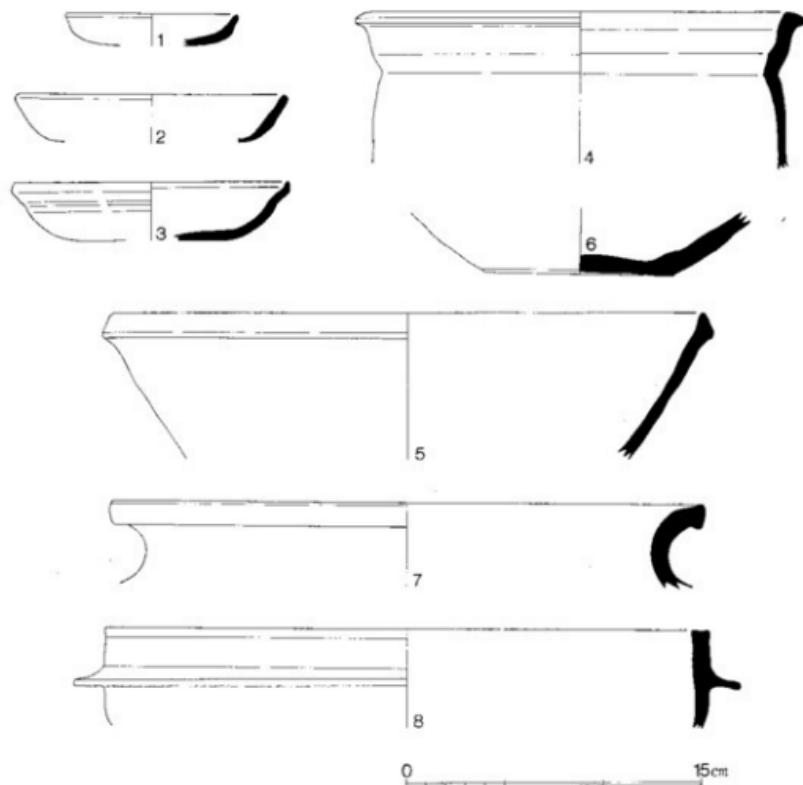
埋葬施設は墳丘中央やや山寄りに構築されたS55°Eの方



第15図 墳丘内出土遺物実測図



第16図 砥石実測図



第17図 溝上及び墳丘覆土出土遺物実測図

向に開口する片袖式の横穴式石室であった。全長約5.3m、玄室長約3.1m・幅約1.5m、羨道長約2.2m・幅約0.9mの規模であり、天井石はすでに失っていたため高さについては不明だが、玄室部で約1.15m、羨道部で約1.3m残存していた。羨道部には閉塞石が残り、玄室の床面全体に玉砂利が敷かれていた。この玉砂利の上に棺台と思われる石が残っていた。

棺台と思われる石は、10個検出され、東側壁に沿う1群と西側壁に沿う1群に大きく分けられる。西側壁に沿う1群は、長さ約3mにわたっており、2回以上の埋葬に伴う棺台である可能性が強い。

このように玄室床面には玉砂利、棺台が残るなど、擾乱を受けた状態ではなかったにもかかわらず、出土遺物は比較的少なかった。遺物類はおよそ6群にわかれて出土したが、それらのすべてがすべて、埋葬時の状態を残しているとは考え難い。特に第5・第6遺物群はともに積み重ねられており、追葬の際に清掃され、片付けられた可能性が高い。また残り4群の内、第1・第2遺物群は棺台と思われる石から考えると、同一の埋葬に伴う可能性が高く、埋葬時の状況をおぼろげにも残すものは、第1・第2遺物群、第3遺物群、第4遺物群の3群と思われる。

出土した土器類はそれのもつ特徴からすれば、第1遺物群と、第6遺物群の一部の土器が最も古く、次いで第3遺物群・第5遺物群・第6遺物群の一部の土器、最も新しいものは第4遺物群の土器と思われる。おそらく田辺編年による、TK43型式、TK209型式、TK217型式に併行するものと思われる。

以上の結果から考えると本墳では3回の埋葬が行われた可能性が高い。ただ追葬の際に、前に行なわれた埋葬が原形をとどめていたならば、石室の規模から考えて、二棺を石室の主軸と平行に安置することは可能であっても、主軸に並列して安置することは不可能であったと思われる。

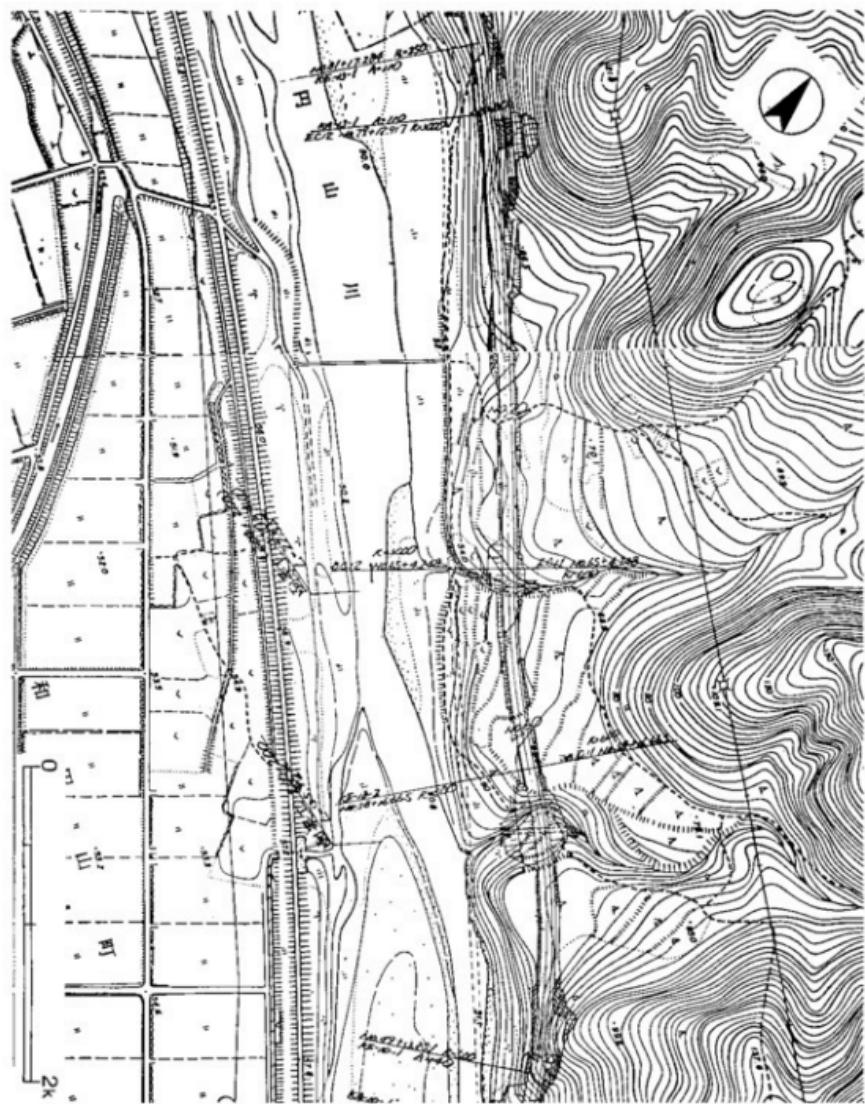
これらの点から本墳では築造当時に奥壁から東側壁に沿って安置され、次で奥壁から西側壁沿いに、最後は袖部に安置されたものと推測される。これらの埋葬に伴って斎葬された須恵類はおよそ6世紀後半から7世紀前半の年代を示すものと思われる。したがって本墳は6世紀後半に築造され、2回の追葬が行われた後、7世紀前半に古墳としての役目を終ったものと思われる。

5号墳に隣接して1号墳が築造されており、墳丘は5号墳より一回り大きいものである。埋葬施設は横穴式石室であったと思われるが、大きく損われておらず、規模・形状等は判然としない。ただ盗掘痕の形状からすれば、5号墳と同じ方向に開口しているものと思われる。また5号墳が傾斜変換点付近の尾根上に位置するのに対し、1号墳は尾根突端に近い平坦な場所に位置している。占地からみれば、傾斜変換点という不安定な場所に位置する5号墳は、1号墳をかなり意識して築造されたものであろう。

石室の開口方向を同じくする、あるいは他に古墳を築造することができる場所があるにもかかわらず、極めて近接して築かれるなど、1号墳と5号墳とは何らかの有機的な関係をもつ可能性が高い。

また両墳の築造年代は、占地からみれば1号墳が古く、5号墳が後出と考えられる。しかし5号墳は、一般的に、但馬地方に本格的な横穴式石室が導入されるといわれる、6世紀後半に築造されている。したがって横穴式石室を埋葬施設とする1号墳とは、多少築造年代に差があったとしても、それほど大きく離れていないものと思われる。

III 高田遺跡確認調査



第18図 遺跡周辺地形図

1. 位置と現状

遺跡は、朝来郡和田山町高田字塚穴に位置する。円山川の右岸に、2本の谷からの堆積物によって形成された扇状地に位置する。三方を山に囲まれ西側が開けているが、西側には円山川が扇状地の末端を削り取りながら北流している。このため扇状地の末端は段状となり、あたかも河岸段丘状の地形を呈している。また、扇状地を形成した2本の谷から流れ出す小川が、開拓谷を形成し、扇状地を3つに分割している。

扇状地の上部は比較的平坦な部分は狭く、緩傾斜の斜面となっている。現在は階段状の田に開墾されており、また江戸時代までは集落があったといわれ、そうしものを偲ばせる石垣、地蔵などが多く残る。

このような扇状地の末端、円山川に沿って改良工事が計画され、分布調査時に須恵器、土師器片が採集されたため、今回確認調査を実施した。

尚調査にあたっては、中央の谷で、北地区と南地区に、調査区を分けて実施した。 (吉謙)

2. 調査概要

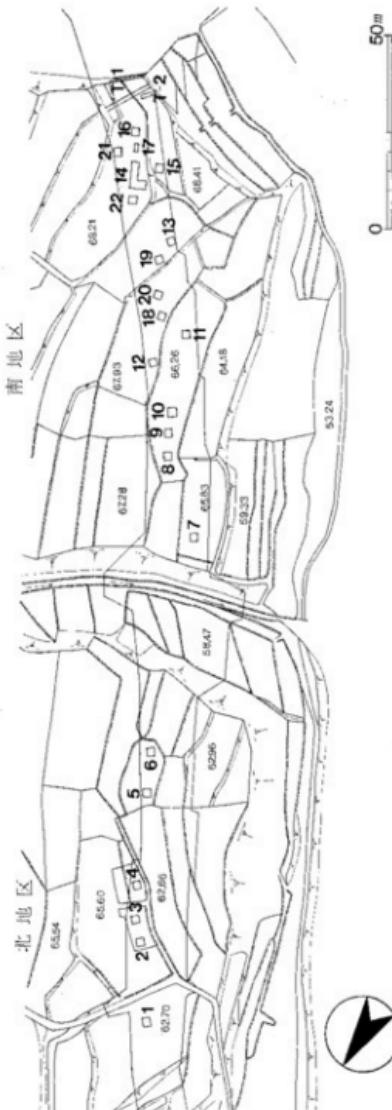
(1) 北地区

No.2～No.3グリッド

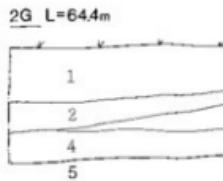
丘陵の張り出しの先端部にあたる。もともと傾斜面であったところに、後方から削り出した土を埋めて畑地にしてある。層序は(1)耕土、(2)旧耕土、(3)埋土、(4)暗茶褐色土、(5)暗黄褐色土(地山)となる。第4層の暗茶褐色土層から、弥生式土器・土師器・須恵器が出土したが、いずれも小破片の為、実測図化できるものはない。遺構は検出されていない。

No.4～No.6グリッド

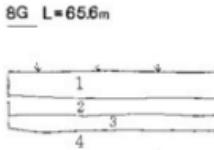
谷川が形成した扇状部にあたるところで、比較的急傾斜の堆積面となっている。畑地にする際に埋められた土層の堆積が厚い。埋土の下層は粒の不ぞろいな灰褐色の砂礫層である。埋土中から須恵器片が出土したが、遺構は検出されなかった。



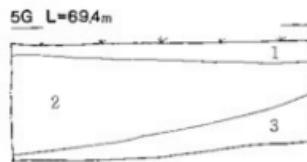
第19図 グリッド及びトレンチ配置図



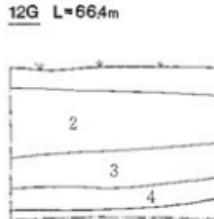
1. 耕 土
2. 旧 耕 土
3. 塚 土
4. 暗茶褐色土
5. 暗黄褐色土



1. 耕 土
2. 黄褐色砂質土
3. 暗灰褐色粗粒シルト
4. 黄灰褐色中疊(地山)

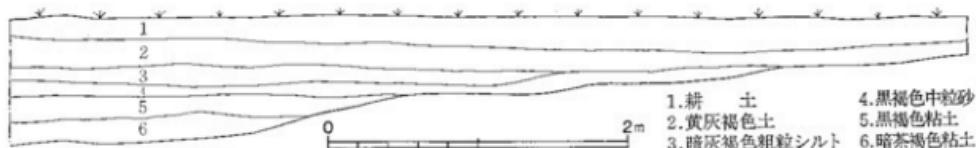


1. 耕 土
2. 塚 土
3. 灰褐色砂礫



1. 耕 土
2. 黄灰褐色砂質土
3. 暗灰褐色粗粒シルト
4. 暗茶褐色微粒シルト
5. 黑褐色粘土

14G L=69.5m



第20図 土層堆積状況実測図

(2) 南 地 区

No.7～No.9 グリッド

谷川が形成した扇状部にあたる。基本層序は(1)耕土、(2)床土、(3)暗灰褐色粗粒シルト、(4)黄灰褐色中疊となる。第4層の暗灰褐色粗粒シルト層から奈良・平安時代の須恵器がまとめて出土した。

No.10～No.13・No.18～No.20・No.22 グリッド

No.10とNo.14を両肩口として谷状地形を呈する地区である。湧水が激しく作業は困難をきわめた。基本層序は(1)耕土、(2)床土、(3)暗灰褐色粗粒シルト、(4)暗茶褐色微粒シルト、(5)黒褐色粘土となる。第3層の暗灰褐色粗粒シルトからは奈良～平安時代後期にかけての須恵器が出土しており、第4層の暗茶褐色粗粒シルト層からは弥生時代後期の土器が出土している。No.22の東断面にはピット状の落ち込みが見られた。

No.14 グリッド

南の調査区で最も高い位置に設定した調査グリッドである。遺物が最も集中して出土したために、グリッドを拡張して調査を行った。基本層序は(1)耕土、(2)黄褐色土(床土)、(3)暗灰褐色粗粒シルト、(4)黒褐色中粒砂(シルト混り)、(5)黒褐色粘土層となる。このうち、第4層の黒褐色中粒砂には、拳大から抱えもあるような大きな石が混在しており、後方から押し出されてきた様相を呈する。

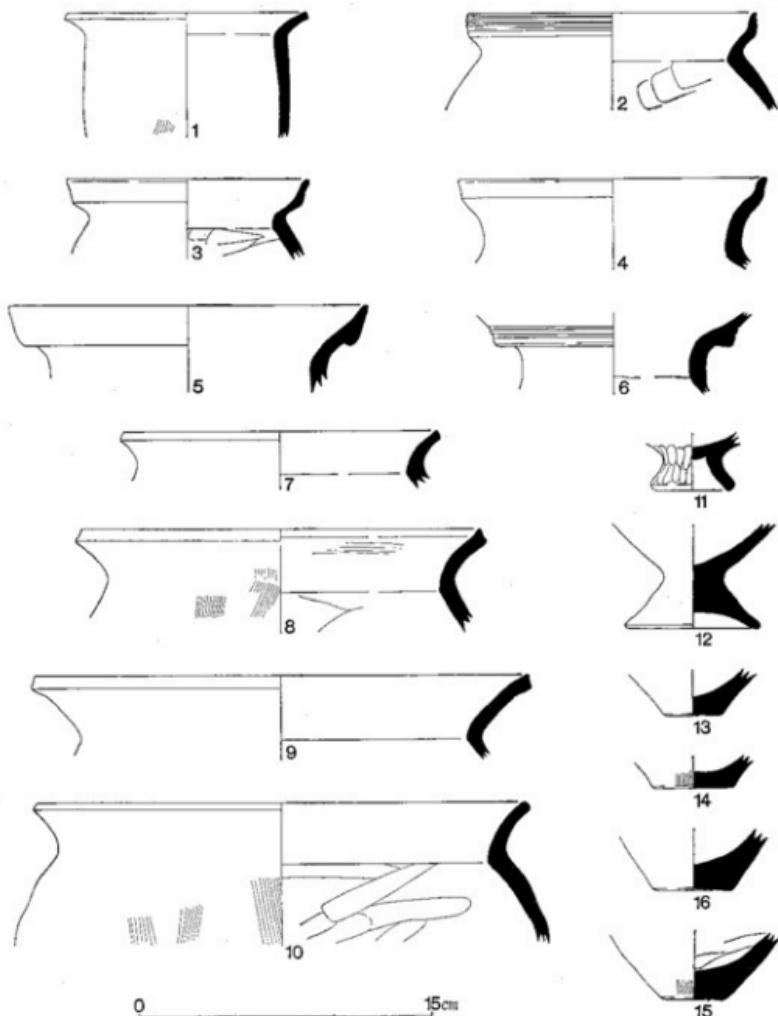
第3層の暗灰褐色粗粒シルトから奈良・平安時代の須恵器が出土しており、第4層黒褐色中粒砂層に

は弥生時代後期の土器がまとまって出土している。地山面は南から北面に傾斜している。

No15・No16グリッド、T₁・T₂トレンチ

調査区の南を流れる谷が形成した扇状堆積層よりなる。耕土直下には暗黄褐色粘土、もしくは暗黄褐色砂礫の地山層が広がる。耕土中から若干の須恵器が出土したが、造構は検出されなかった。

(森内)

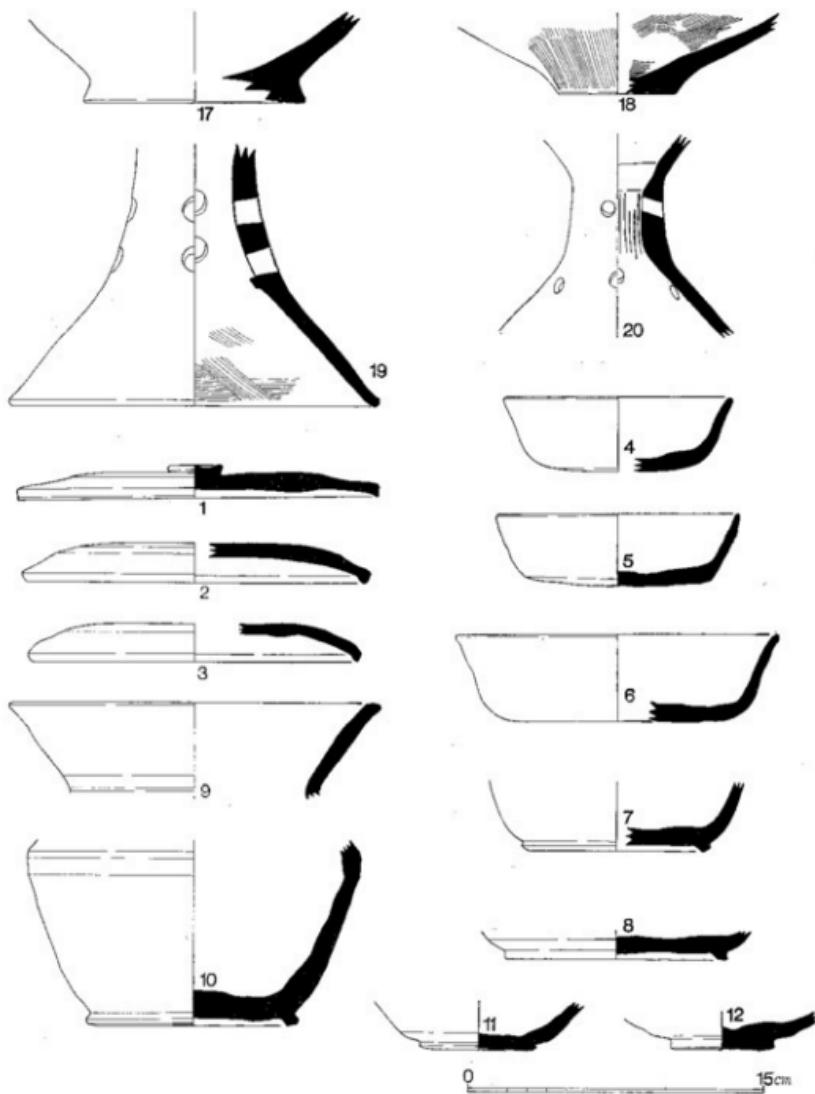


第21図 出土遺物実測図(1)

3. 遺 物

(1) 弥生式土器及び土師器

變形土器A 1は口徑約12.4cmで、胴部から逆L字状に外反する口縁を有する。小形のもの胴部の一部に刷毛目が残る。胎土は砂粒が多いが焼成は良好であり、器表が黒褐色、内面が明るい黄褐色を呈する。



第22図 出土遺物実測図 (a)

壺形土器B 所謂二重口縁の壺形土器である。2は口縁部に3本の沈線を施し、内面にヘラ削りが残る。3は口縁部の上半が外反し、内面にヘラ削りが残る。

壺形土器C くの字に外反する口縁を有する壺形土器である。口径に約16cm～25cmとばらつきがあり、8・9は口縁端部をつまみ上げている。8・10は外面に刷毛目、内面にヘラ削りを残す。

壺形土器底部 4個体出土しているが、いずれも小形であり、14以外は中央が浅く凹む。14・15には器表に刷毛目が残り、15は内面にヘラ削りを残す。

壺形土器 4は外反する短い頸部に、上半が外反する口縁部をもつ。5はほぼ直立した頸部をラッパ状に開いて擴口縁とし、口縁を貼り付けたものである。6は直立した頸部が大きく開き、口縁部下端に粘土を貼り付けて二重口縁としている。口縁部下端に二条の沈線が施され、口縁部上半を欠く。鉢形土器11・12は鉢形土器の底部と思われ、11は器表に指ナデが残る。

器台 19・20は器台の脚部である。19は上下2段に、直線的に配置された四方の円形透孔をもつ。内面には刷毛目が残り、筒部内面には箒によって引かれたと思われる4本の直線が残る。20は脚部が大きく開き、上段は3方の、下段は4方の円形の透孔が施されている。杯部の底部内面にはヘラ削りが残る。

(2) 壺 輪

円筒埴輪の基部から第1突帯までの破片である。底面から5.6cmと8.6cm付近で粘土紐の接合痕が残る。外面には縦方向の刷毛目が残り、底面近くの内面には指頭圧痕が残る。底径約17.5cm、第1突帯までは約8cmを測る。北地区No.3グリッドの暗茶褐色粘質土層から出土したものである。

遺跡の周辺では善父町觀音塚古墳、東上野1号墳、和田山町池田古墳などの5世紀中頃から6世紀前半にかけて築造された古墳に出土例があり、本例は背後の奥山、広六林群集墳からの流れ込んだ可能性もある。(吉謙)

(3) 須 恵 器

蓋(1～3) 頂部のふくらみが少なく、全般に平らに仕上げている。天井部はいずれもヘラ削りを施している。口縁部の屈曲は甘く、端部は丸くおさめている。胎土はいずれも大粒の石を含み、あまり精製されていない。つまみは扁平で、中央部がわずかに隆起している。

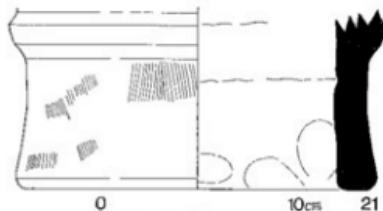
杯A(4～6) 平底の杯である。体部と底部の屈曲部は丸く、両者の境は不明瞭である。内外面とも横ナデを施し、底部はヘラ切りである。4・6の口縁部はわずかに外反する。

杯B(7～8) 体部直下に短い高台がつく。高台はわずかに外方にふんばる。底部はヘラ切りで

ある。

広口壺(9～10) 9と10は恐らく同一個体と思われる。口縁は斜め上方に大きく開く。肩部と胴部の境は鋭く屈曲し、稜をもつ。高台は短かく外方へふんばる。

椀(11～12) 糸切りの平高台をもつ椀である。高台が低く、底部は糸による切り離しのままで、粘土が



第23図出土遺物実測図(3)

高台の側面にはみ出している。灰白色で焼成は甘い。12は高台の径は小さいが、高台側面をへたりて整えている。暗青灰色を呈し、白い砂粒を多く含んでいる。

4 ま と め

遺跡周辺は円山川の右岸に位置し、背後の山地から流れる谷川によってもたらされた扇状堆積層で形成されている。

遺物は南地区からの出土がほとんどで弥生式土器・土師器・須恵器が出土している。弥生式土器は後期に属するもので磨滅が著しく、背後から流されてきた可能性が強い。須恵器は弥生式土器、土師器に比べて出土量も多く磨滅も少ない。器形的には奈良時代のプロポーションを残しているが、全体に口縁や端部のシャープさが欠けている。奈良時代後半から平安時代前期頃に属するものであろう。

今回の調査区は扇状地の先端部にあたっており、上記のように遺物は出土したもののみ構は検出されていない。K22の東壁にピット状の落ち込みが検出されていることから遺跡は今回の調査区を西限として、もう少し山寄りに存在しているものと思われる。（森内）

註1 兵庫県教育委員会編『特別地域埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』第3分冊 1974

註2 養父町教育委員会・武庫川女子大学考古学研究会『但馬・大蔵古墳群』 1978

註3 錦木義昌氏によって実施されたようである。

註4 註2と同じ。

註5 本古墳の調査と合せて、調査を実施した古墳群である。『夕垣古墳群・夕垣遺跡発掘調査報告書』として本報告と同時に、出版予定。

註6 池田正男『養父・觀音塚古墳』 1980

橋本誠一『兵庫県下における前方後円墳』『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第2集 1974

註7 註2と同じ

註8 1980年に関西電力の鉄塔工事中に発見されたが、計画変更して、現状保存されている。
政次義孝氏よりご教示を得た。

出土遺物観察表及計測表

土器観察表

石室内出土土器

単位(cm)

土器番号	器 形	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考	
		口径	器高				
1	杯	蓋	13.6	3.5	天井部は扁平で、天井部と口縁部の明瞭な区別はない。 外傾する口縁部の端部は丸く、端部上方の内面には一条の沈線を施す。	天井部内面にクロスする静止ナデ。 天井部ほぼ全面に左回転のヘラ削り。	
2	タ	身	12.6	4.1	口縁部は内傾してたちあがり、端部は丸い。 受部はやや外上方にのび、受部上面に沈線状のナデ。 受部と口縁部の境界は沈線状を呈す。	体部のほぼ全面に左回転のヘラ削り。	1とセットの可能性。
3	タ	蓋	12.2	4.4	天井部と口縁部との明瞭な区別はない。 天井部が内傾して、口縁部となる。 口縁部はやや内彎し、端部は丸い。	天井部1/2に左回転のヘラ削り。	
4	タ	タ	11.6	3.5	天井部と口縁部の明瞭な区別はない。 口縁部は外反し、端部は丸い。 小形である。	天井部ヘラ削り未調整。 天井部内面静止ナデ。	
5	タ	身	10.5	3.4	小形である。 口縁部は内傾がきつく、上半から低くたちあがり、端部は丸い。 受部は外上方に上がり、端部は丸い。	底部ヘラ切り未調整。 底部内面静止ナデ。	
6	タ	蓋	15.3	4.7	天井部と口縁部との境界は、ナデ調整のためか、浅く凹む。 口縁端部は丸い。	焼成不良のため褐色。 天井部の1/2に左回転のヘラ削り。	かなりの部分の器表面が剥離している。
7	タ	タ	14.5	4.1	天井部と口縁部の境界は、ナデによる幅広い凹みによってついている。 口縁部は外反し端部は丸い。	天井部の1/2に左回転のヘラ削り。 焼成不良	9とセットの可能性。
8	タ	タ	14.2	4.0	天井部と口縁部の境界に稜・凹線等ではなく、境界上部の天井部が浅く凹む。 口縁端部は丸い。	天井部の1/2に左回転のヘラ削り。 焼成不良	11とセットの可能性。
9	タ	身	12.7	4.1	口縁部は低く、内傾してたちあがり、端部は丸い。受部はかなり外上方にのび、端部は丸い。	焼成不良。 静止ナデはみとめられない。 体部の1/2に左回転のヘラ削り。	7とセットの可能性。
10	杯	タ	12.8	3.6	口縁部は内傾し、端部は丸い。 受部は外上方にのび、受部上面に沈線状を呈するナデ。	内面の静止ナデはかなり広く、体部の1/2に及ぶ。 胎土中に黒色土粒を含む。 体部の1/2に左回転のヘラ削り。	体部に胎土内の空気による膨みがミケ所みられる。
11	タ	タ	12.9	4.1	口縁部は内傾し、端部は丸い。 受部は外上方にのび、端部は丸い。	体部の1/2に左回転ヘラ削り。	8とセットの可能性。 焼成不良

土器番号	器 形	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
12	タ 蓋	14.8	4.3	天井部は扁平で、口縁部との境界は純い線をもち、凹線状を呈す。 口縁部は上半は外反した後、下半はやや内傾する。 端部は丸い。	体部の3/4に左回転のヘラ削り。	13とセットの可能性。 天井部に一本線のヘラ記号。
13	タ 身	13.4	4.3	口縁部は内傾してたちあがり、端部は丸い。 受部はやや外上方にのび、端部は丸く内厚である。	体部の3/4に左回転のヘラ削り。	体部から底部にかけて1本の直線のヘラ記号。
14	タ タ ?	13~14 ?	3.5 4.5		焼成不良のため褐色。 左回転のヘラ削りが体部の3/4以上にみられる。	器表面の剥離がひどく、口縁部、受部ともに欠損。 詳細不明。
15	壺		9.5 10.2	口縁部は外傾して、端部は丸い。 基部の大い頸部が外傾し、直線的にのびて、口縁部となる。 体部は最大径がちょうどいいの位置にある。 底部は丸い。	頸部から肩部にかけてはカキ目調整。 体部下半から底部にかけて左回転ヘラ削り。 底部内面に指頭圧痕が残る。	

溝 内 出 土 土 器

単位(cm)

上器番号	器 形	法 量		形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		口径	器高			
1	碗	10.6	5.0	体部と口縁部はほぼ直立し、口縁端部は丸い。 底部は扁平。	底部ヘラ切り未調整。	焼けひずむ。
2	杯	13.0	4.5	天井部が高い感を受けるが、天井部と口縁部の明確な区別はない。 口縁部は外傾し、端部は丸い。	天井部ヘラ切り未調整。 天井部の内面の静止ナデはかなり広い。	3とセットの可能性。
3	高杯	11.0	9.2	口縁部の内傾きつく、上半がややたちあがるが、全体に低く、端部は丸い。 受部は外上方にのび、端部は丸い。 体部にヘラ削り等は認められない。	全体粗い調整である。	2とセットの可能性。

鉄製品計測表

鉄 鋼 (長頭鎌)

(単位cm)

番号	全長	刃 部			笠 披 部			茎 部			重量 (g)	備 考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
F 3	14.8	6.2	2.6	0.4	3.8	1.0		6.9	0.4	0.4	25.0	
F 4	14.3	6.7	2.6	0.5	3.4	0.0	0.5	5.4	0.5	0.4	32.0	
F 5	14.1	7.8	2.9	0.4	4.1	0.8	0.4	5.1	0.6	0.5	27.7	
F 8	10.5	6.0 以上	2.2	0.4	3.1	0.8	0.4	4.0	0.4	0.3	18.2	逆刺の先端欠損
F 9	11.7	5.7	2.4	0.4		0.8	0.4		0.4	0.3	19.8	
F10	13.2	6.2	2.2	0.4		1.1	0.5		0.3	0.2	17.8	基端部欠損
F12	14.15	7.6	2.9	0.4	4.1 ?	0.7	0.4	5.0 ?	0.3	0.2	25.2	
F13	13.4 ?	6.8	2.7	0.3							19.4	
F14	13.3 ?	7.0	2.7	0.4							23.9	
F16	10.4	3.3	1.5	0.3	3.5	0.5	0.4	3.5	0.3	0.2	7.4	
F17	5.7	0.8 以上	1.8	0.3	4.2	0.4	0.4	1.5	0.3	0.3	4.6	刃部茎部、茎下半欠損
F18	8.4	3.6	1.6	0.3	3.6	0.6	0.4	2.4	0.3	0.2	7.25	
F19	7.0	1.3 以上	0.7 以上	0.2	2.8	0.5	0.3	3.5	0.4			刃部の大部分と茎端部を欠損
F20	9.5	3.6	1.7	0.3	3.3	0.6	0.4	3.6	0.3	0.2	7.3	
F21	9.0	3.5	1.7	0.2	3.3	0.5	0.4	2.9	0.4	0.3	7.8	
F23	10.7	3.1	1.4	0.3		0.5	0.4		0.5	0.4	2.0	
F25	8.3	3.25	1.7	0.3	3.1	0.5	0.3	2.9	0.3	0.2	5.75	
F26	12.0	6.9	2.7	0.5	4.2 ?	0.9	0.6	3.0 ?	0.4	0.3	23.2	

鉄 鋼 (有茎鎌)

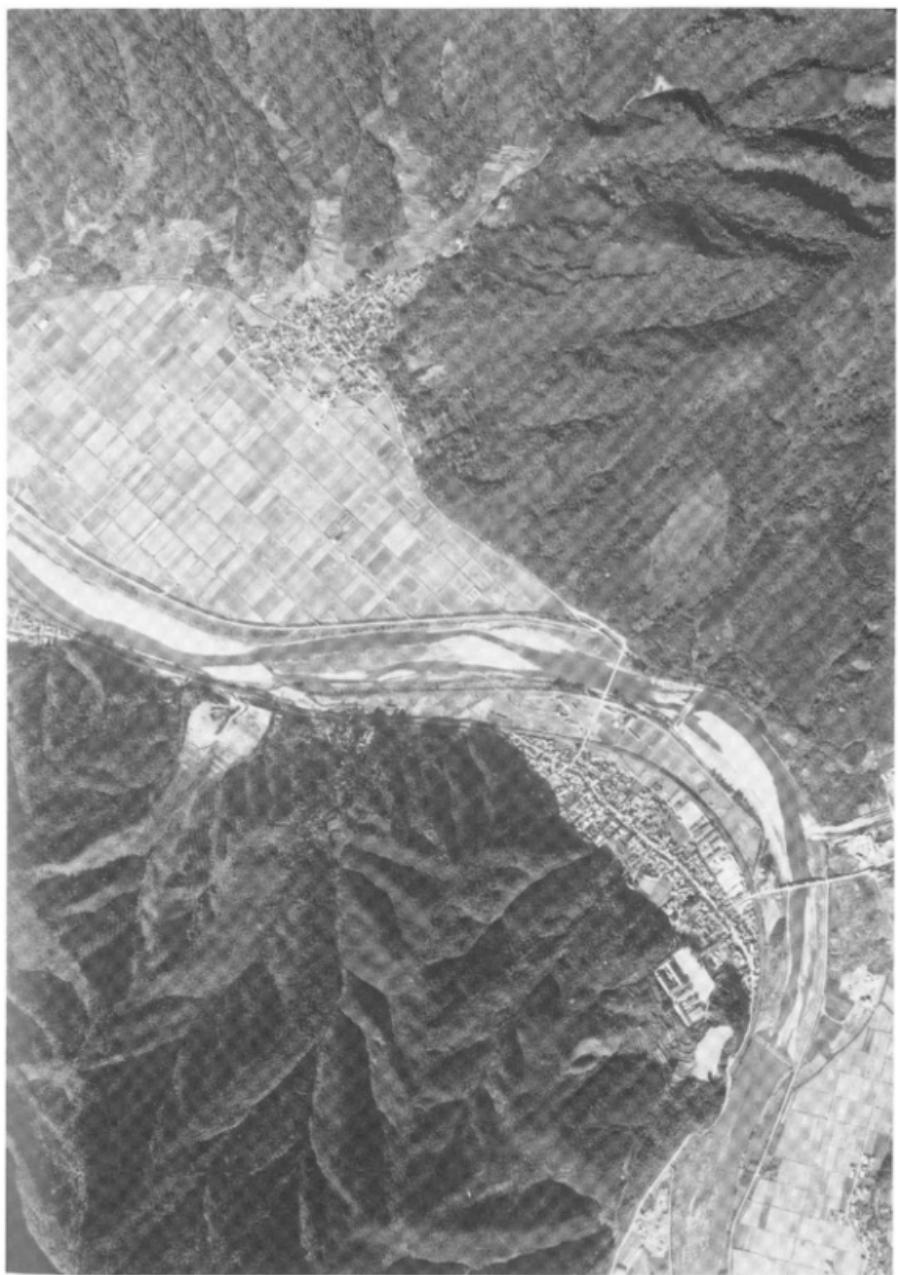
(単位cm)

番号	全長	刃 部			笠 披 部			茎 部			重量 (g)	備 考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
F 1	16.9	2.8	0.9	0.25	8.4	0.6	0.3	5.7	0.5	0.4	19.1	
F 2	19.7	3.0	0.9	0.3	10.7	0.6	0.4	5.8	0.4	0.4	13.7	
F15	11.7	1.6	1.4	0.2	7.5 ?	0.5	0.4	3.1 ?	0.4	0.4	8.9	

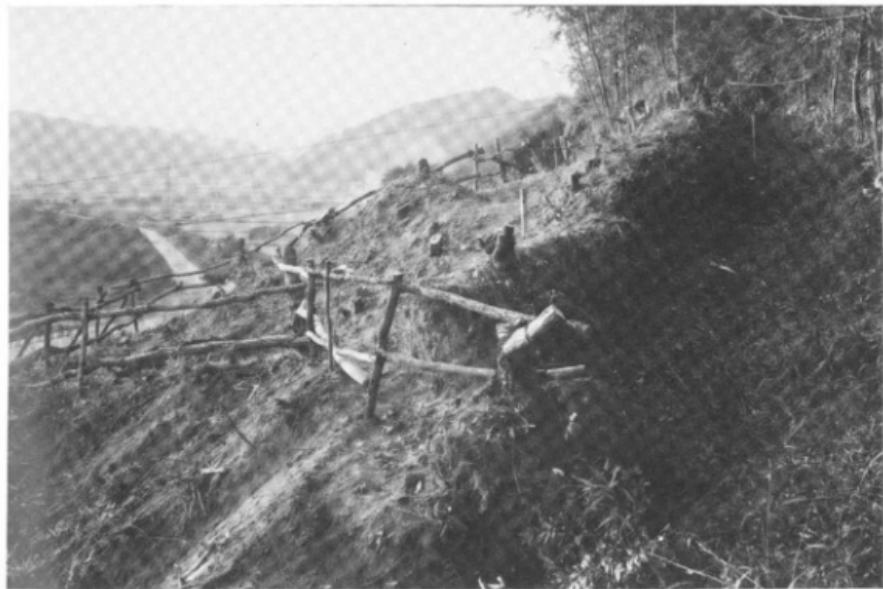
刀子

(単位cm)

番号	全長	刀 部			笠 被 部			茎 部			重量 (g)	備 考
		長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
F 6	12.7	7.6	1.3	0.4				5.1	0.9	0.4	21.1	
F 7	9.1	4.6	0.8	0.4				4.5	0.6	0.5	10.15	
F11	14.8	8.7	1.3	0.4				7.1	1.0	0.4	33.8	
F22	10.6	6.6	1.1	0.4				4.0	0.8	0.3	11.75	

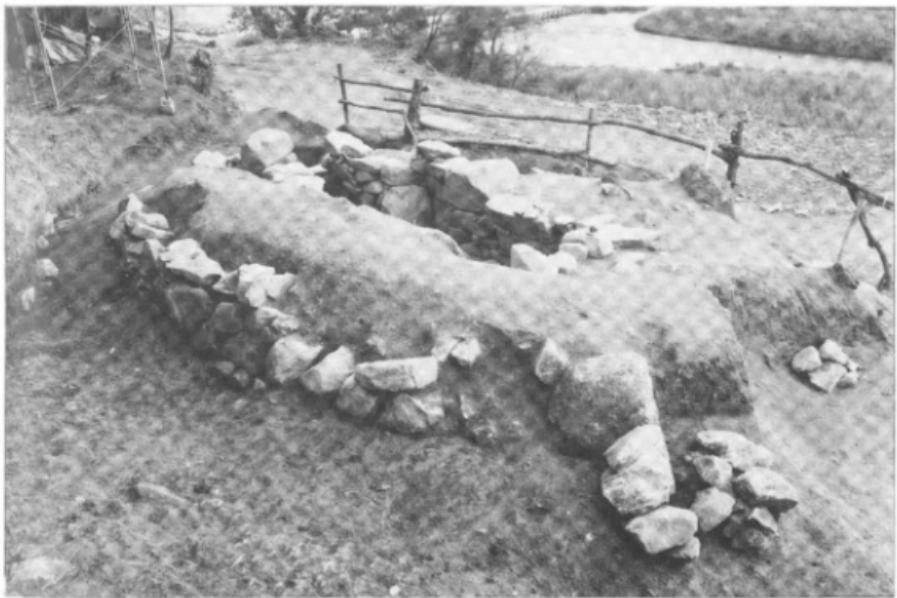


沢原5号墳航空写真



上) 遠景(円山川堤防上より)

下) 調査前の状況



上) 横穴式石室の閉塞状況と列石の関係

下) 墳丘裾部列石



上) 閉塞状況 (渋道側から)

下) 閉塞状況 (玄室側から)



上) 横穴式石室全景

下) 獣門部よりみた横穴式石室

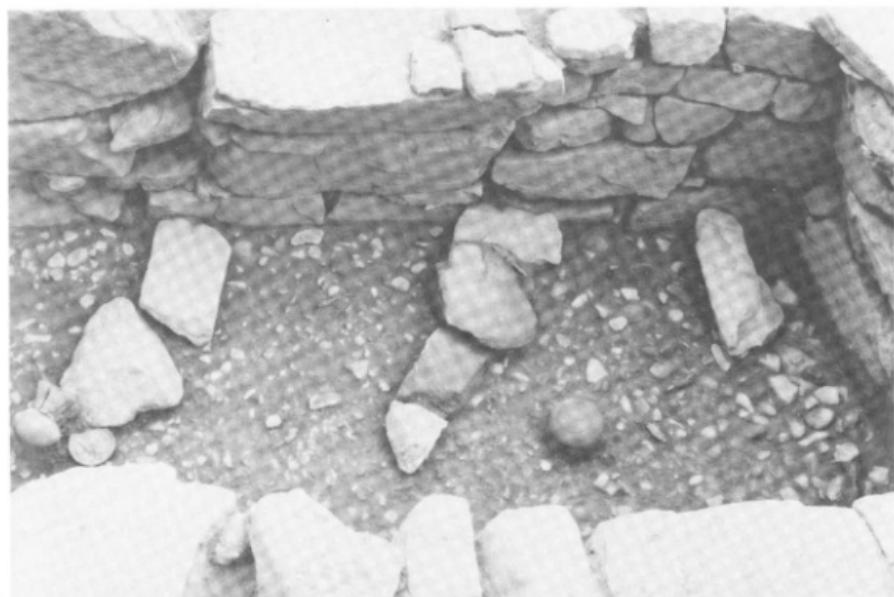


上) 横穴式石室奥壁の状況

下) 玄室側から見た羨道部の状況

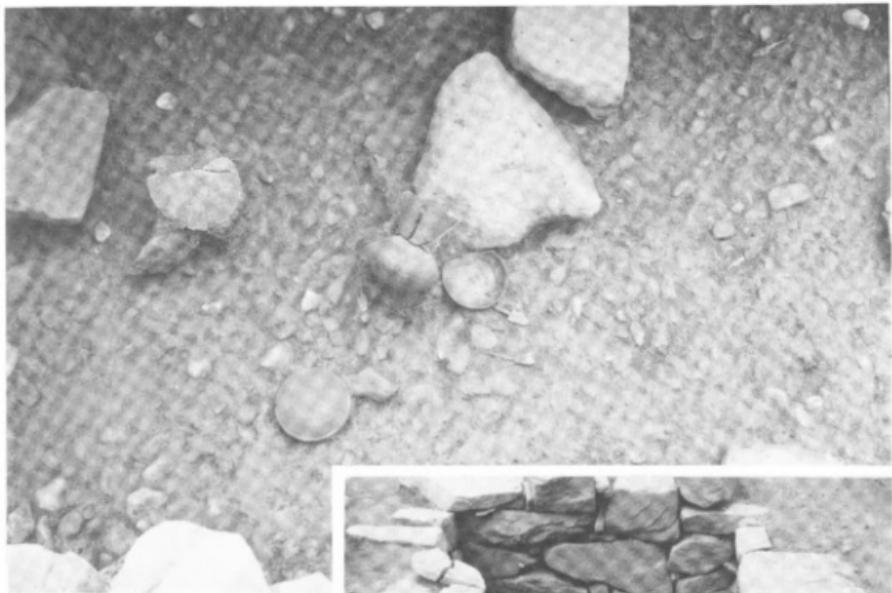


上) 東側壁上から見た玄室内部の状況
下) 美道部上から見た玄室内部の状況



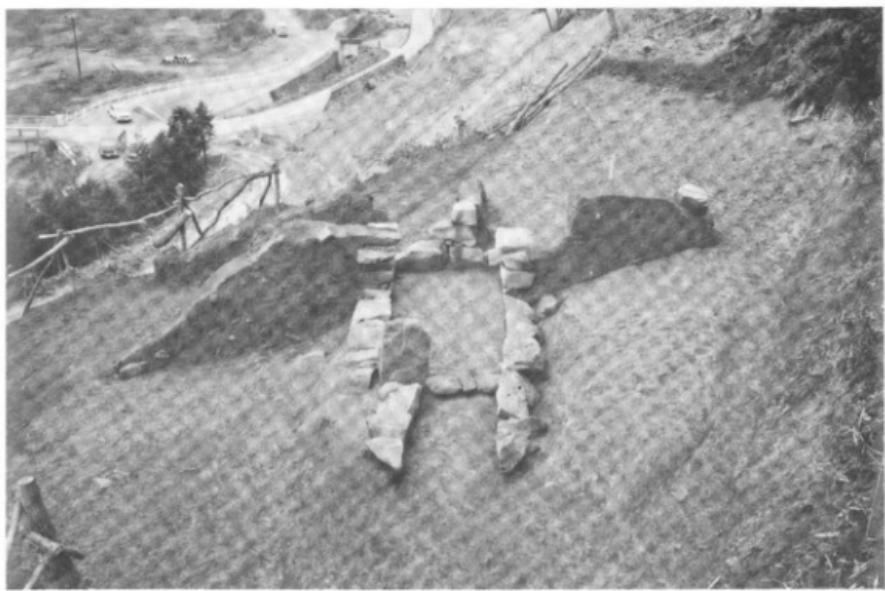
上) 才1・才2遺物群出土状況

下) 才3遺物群出土状況



上) オ4 遺物群出土状況

下) 遺物・石除去後の玄室床面

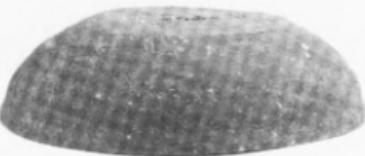


上) 横穴式石室基底部の状況

下) 斜面下方側の封土断面



1



4



2



5



3



12



6



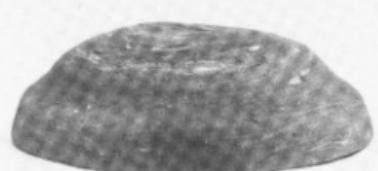
13



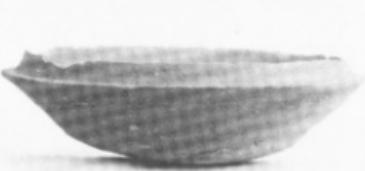
8



11

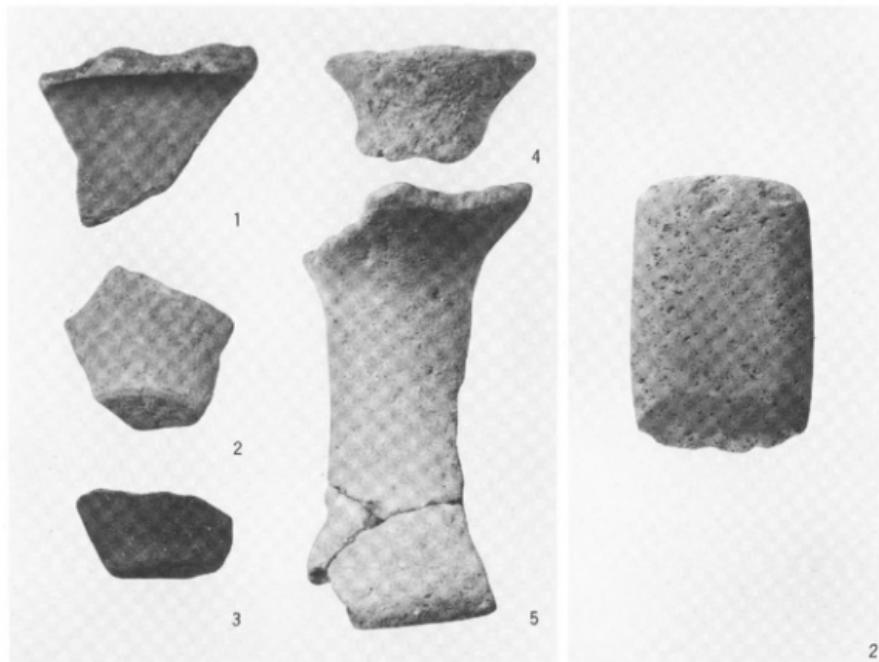
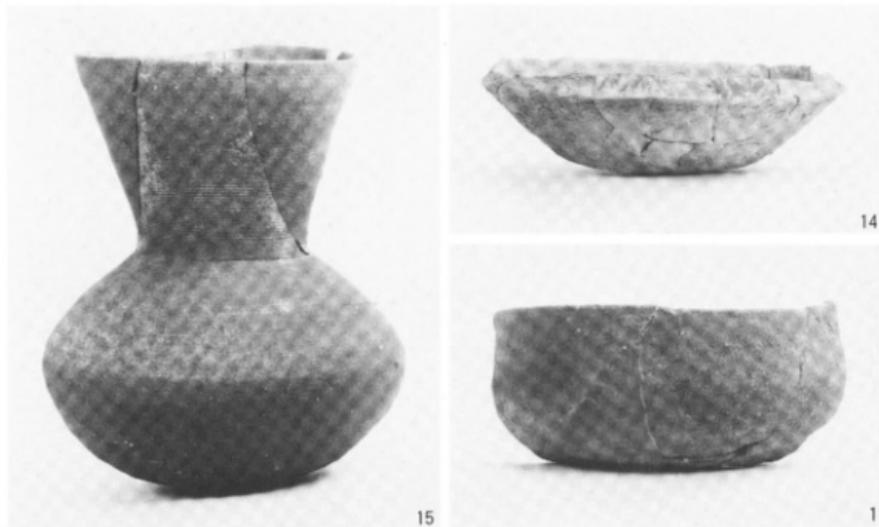


7

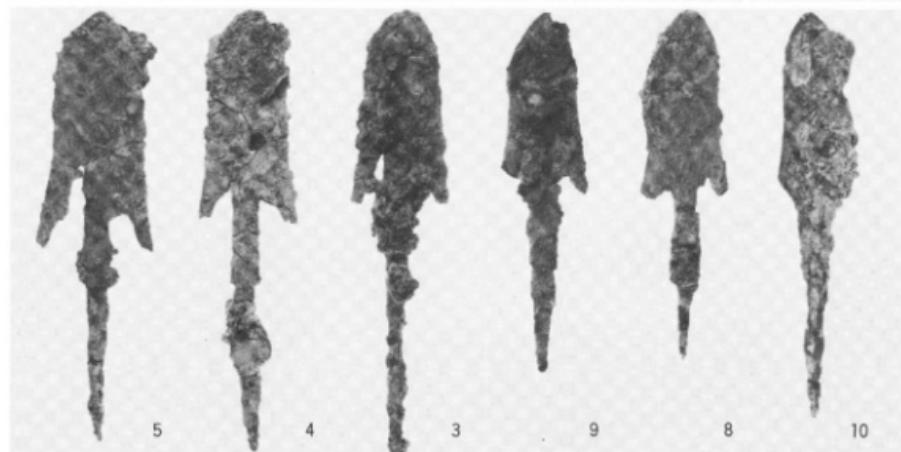
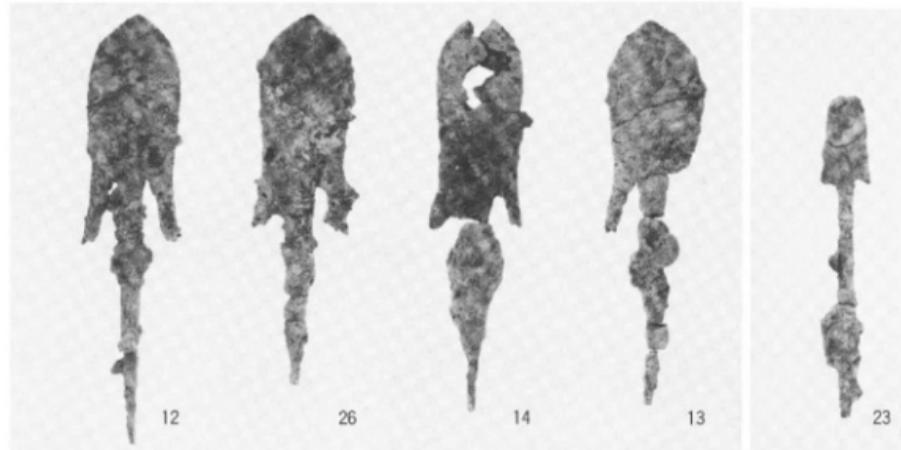
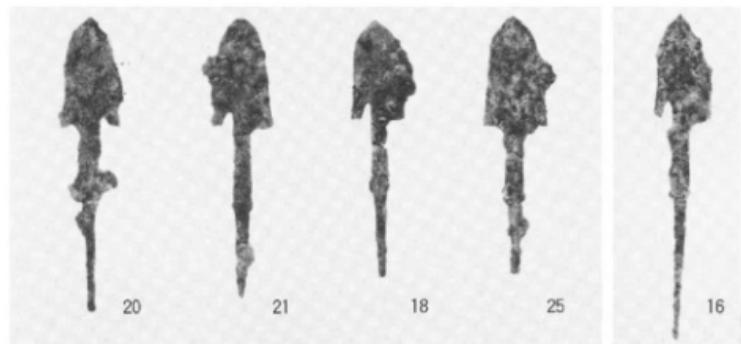


9

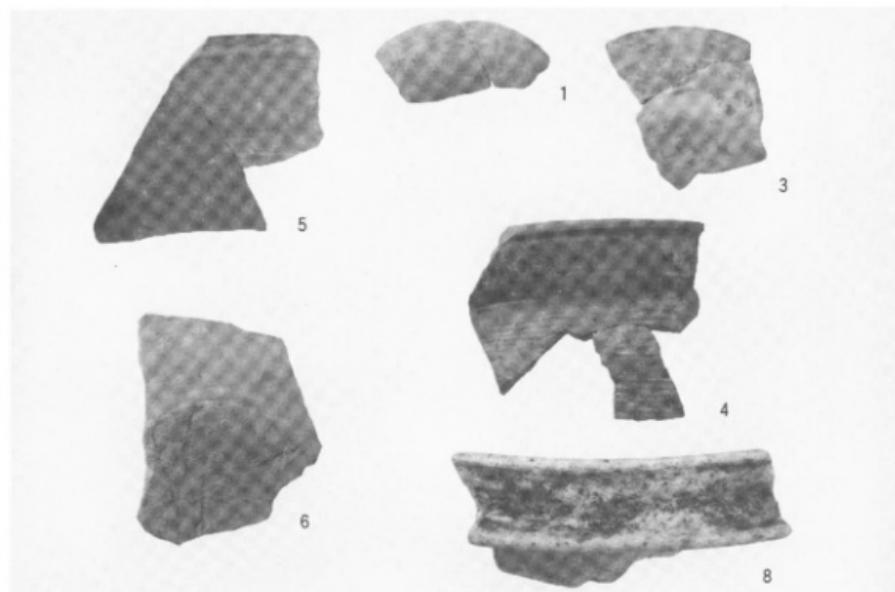
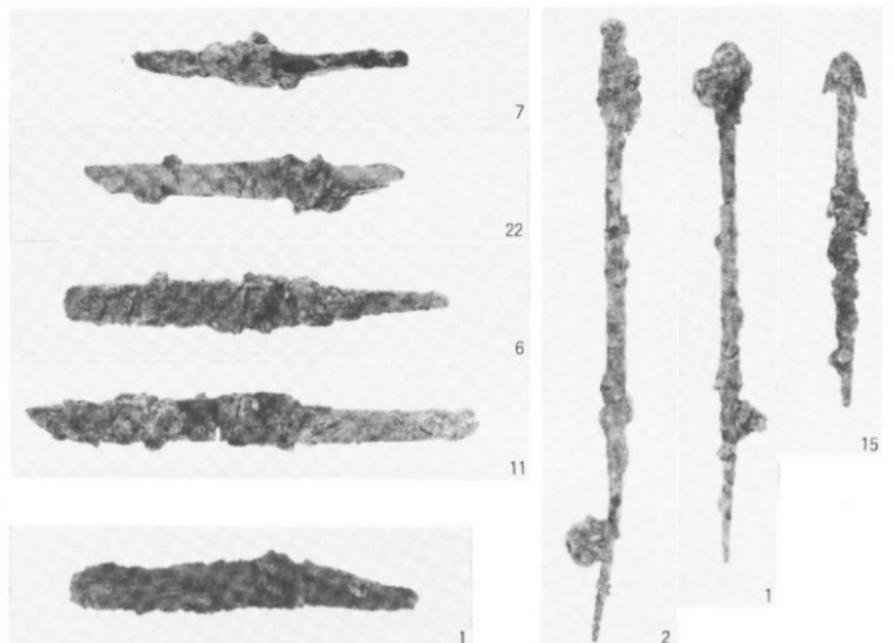
石室内出土遺物(須恵器1. 2-方1, 3-方3, 4. 5-方4, 6~8-方5, 9~13-方6遺物群)



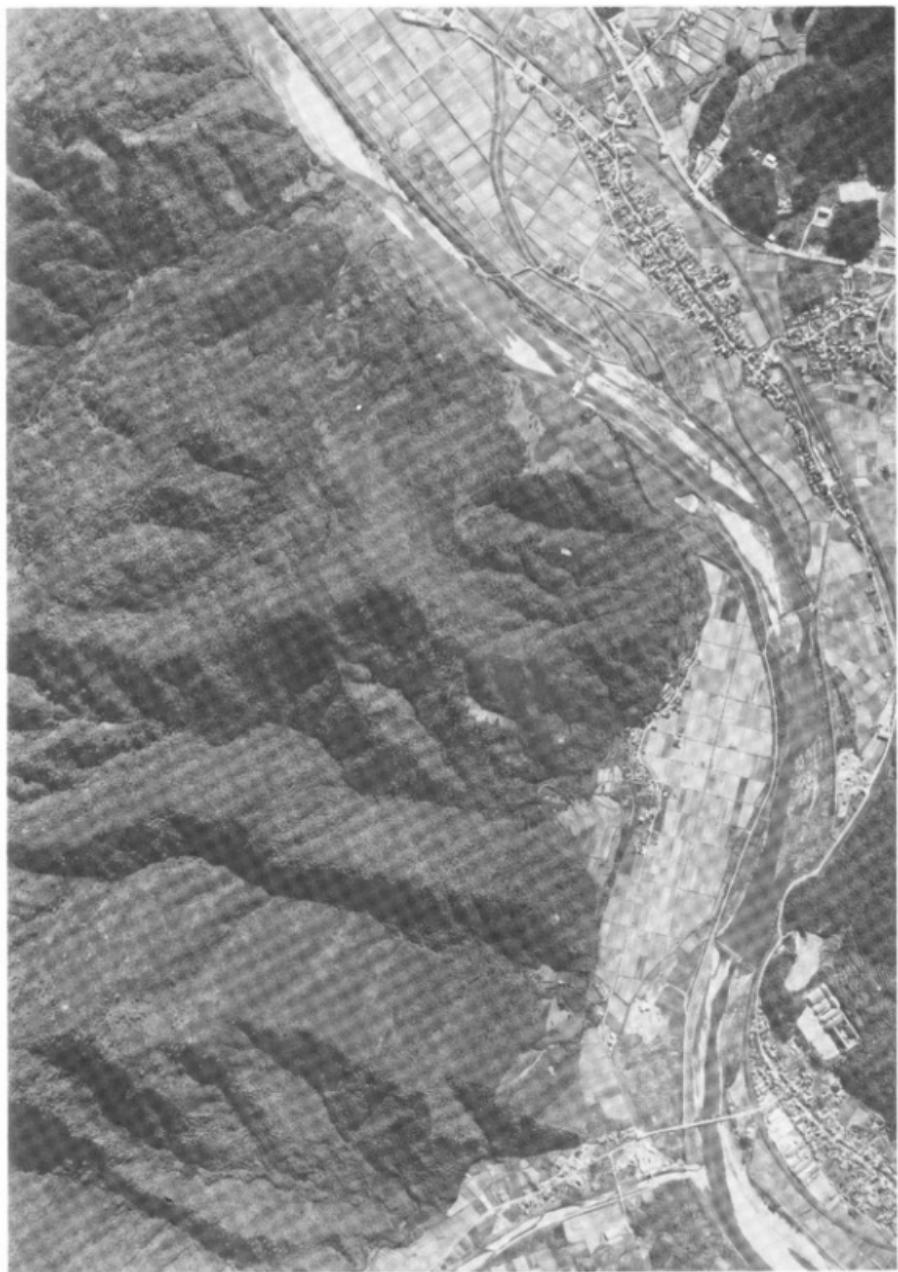
上) 左, 右上, 石室内埋土出土遗物 (須恵器) 右下溝内出土遗物
下) 墳丘内出土遗物 (弥生式土器, 石斧)



石室内出土鉄製品(25・18・21・20-矛4, 12~14・26-矛2, 3~5・8~10・16-矛3遺物群)

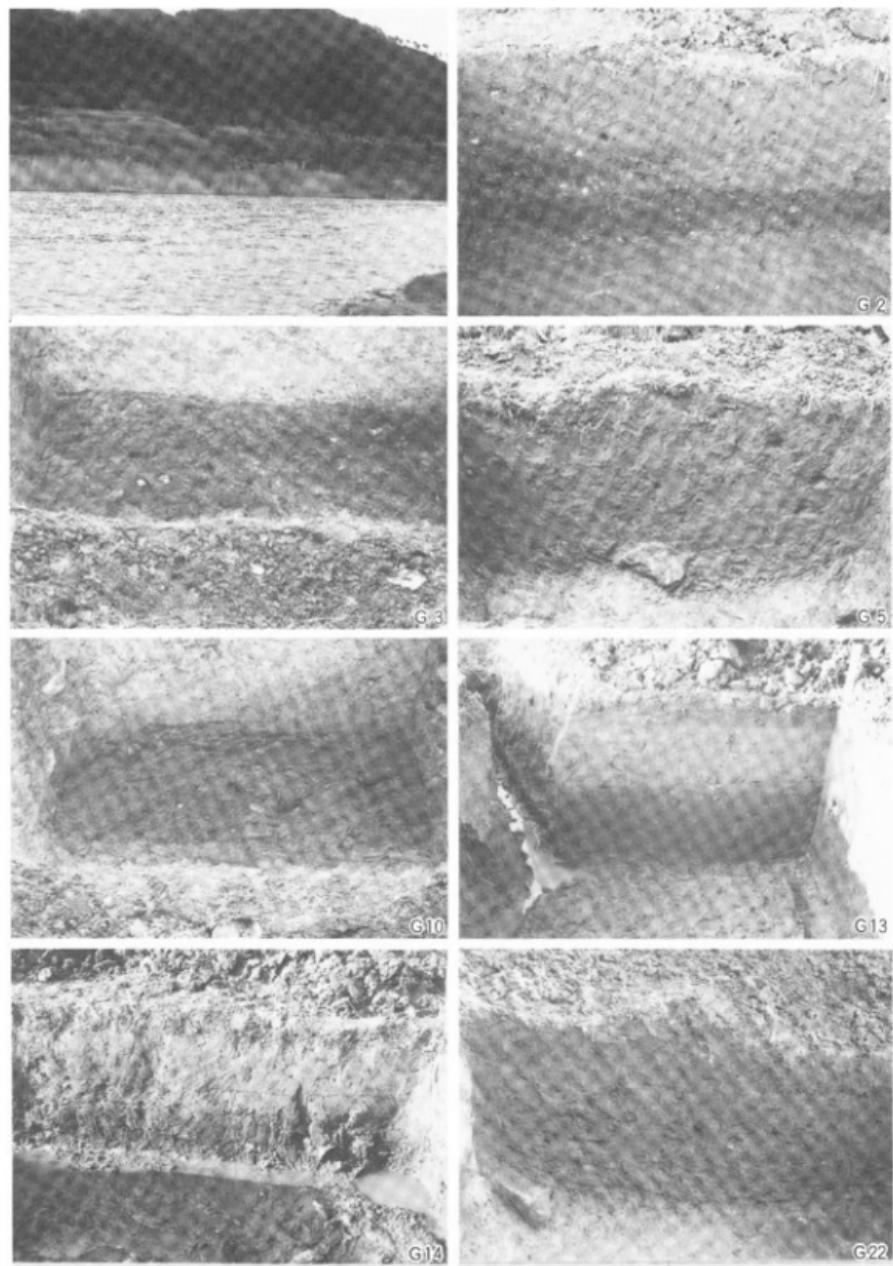


上) 石室内出土鉄製品(2・6・7・11-矛3, 22-矛4, 1-矛1, 15-矛2遺物群, 刀子1-溝内)
下) 溝上及墳丘覆土出土遺物



遺跡付近航空写真

圖版
第一六 高田遺跡



全景及土層堆積狀態

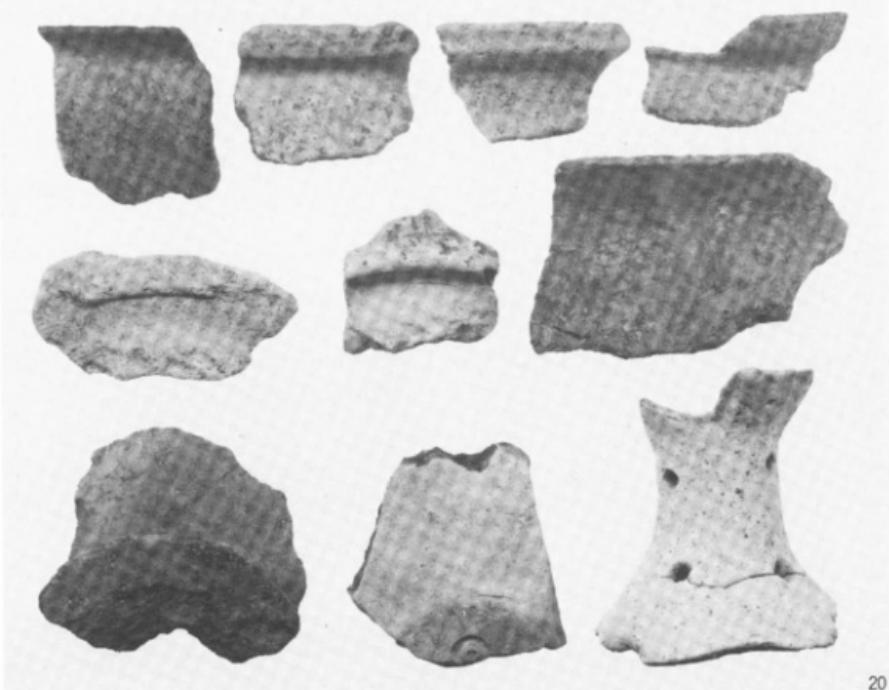
15



19

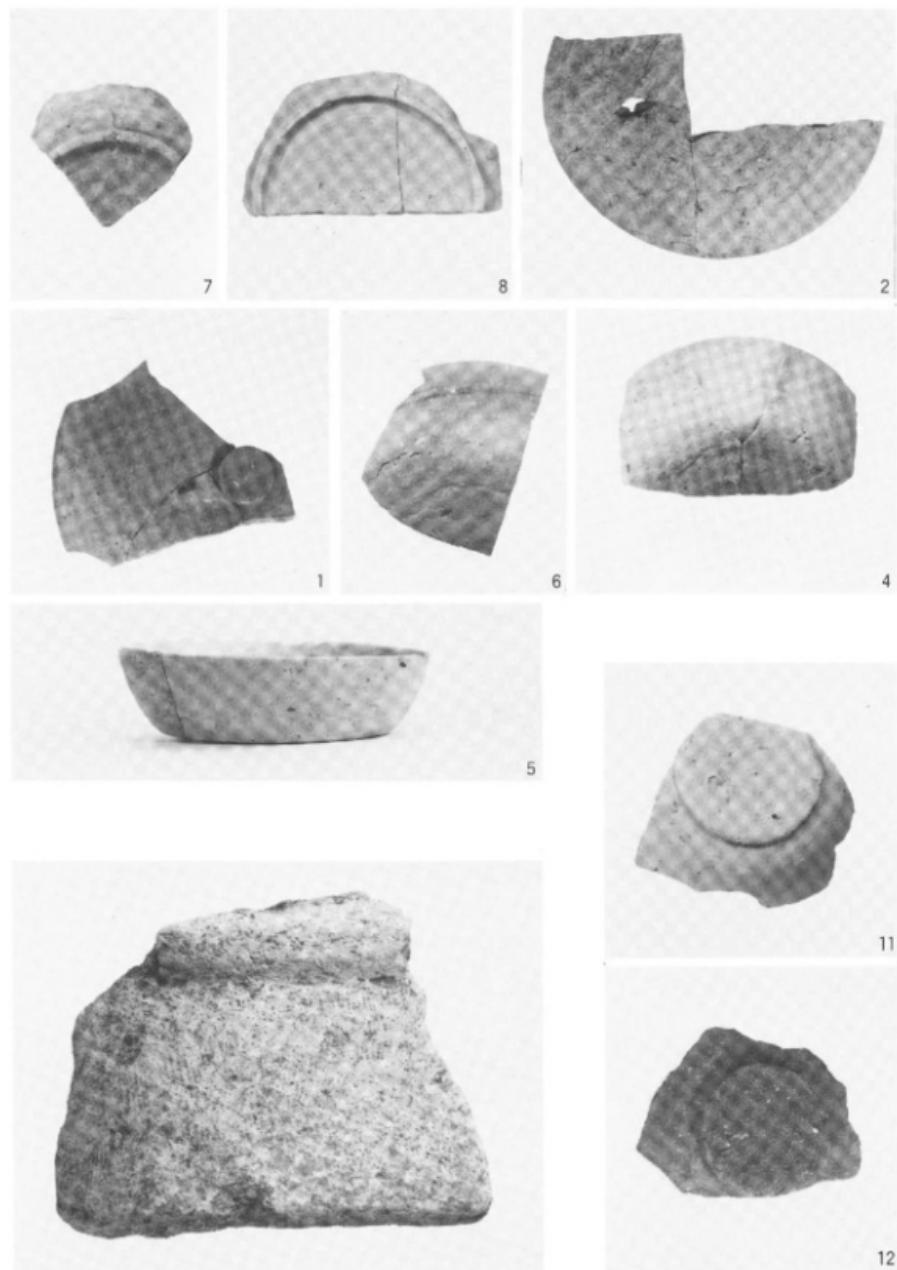


12



20

出土遺物（弥生式土器、土師器）



出土遺物（埴輪及須恵器）

沢原5号墳・高田遺跡
発掘調査報告書

昭和58年3月31日発行

編集・発行 兵庫県教育委員会
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
TEL 神戸(078)341-7711
印 刷 三ヶ輪印刷工業株式会社
神戸市兵庫区淡町2丁目3番14号
